あなたに未来を

minimum

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あなたに未来を

【Ｎコード】
Ｎ０５０９Ｈ

【作者名】
ｍｉｎｉｍｕｍ

【あらすじ】
間違っていたとしても構わない。貴方達を救うことが出来るのならば……。黒の組織との最終局面を迎えて、大きく揺れ動くそれぞれの想い。果たして未来を掴むことは出来るのか！？※初連載です。マイペースで進めていきたいと思いますので、気長に、広い心で読んで下さったら嬉しいです。一応新×志（哀）の予定ですので、新蘭派にはｂａｃｋされることをお勧めします。ただし作者の力不足にて、両想いまで到達しないかも。結末は誰にも分からない……。

プロローグ

両手に握りしめた拳銃が、重い。

狙い定めた拳銃の先には、長い銀髪を持つ男―――ジン。

「シェリー、お前に撃てるのか？直接人間を殺したこともないお前が、その手を真っ赤に染める覚悟があるのか？」

…覚悟？そんなの分からない。

でも今撃たなければ、間違いなくジンの向こうにいる工藤君と蘭さんは殺されてしまうだろう。

「灰原っ！やめろっ！」

工藤君。貴方いつか言ってたわね。

人が人を殺す理由が分からないって。

でも私から言わせてもらえば、理由が分からないという方が分からない。

人間の心なんて、簡単に壊れてしまうのだ。

友情や愛情、信頼や希望が奪われたり裏切られたり。所詮憎しみや殺意とは紙一重なのだ。

私は小さな頃から、組織に大事なものを奪われ続けてきた。
特に、姉が目の前の男に殺されてしまった時には、これ以上にない憎しみを覚えたのだ。
……きっと、幸せに暮らしてきて大事なものを失ったことのない貴方には、分からない感情なのかもしれないけれど。

でも、

「灰原、拳銃を下すんだ！」

誰かを守るために、そうしなければならない時だってあるでしょう？

確かに、こんなに薄暗く何もかもが歪みきったこの世界は、貴方達には似合わない。
常に太陽の下で光り輝く貴方や蘭さんには、こんな殺伐とした感情は似合わない。
手を汚すのは、私だけで十分なのだ。

間違っていたとしても構わない。
これで貴方達を救うことが出来るのなら。
全てを終わらせることが出来るのならば。

――――例え貴方達と、二度と会えなくなってしまっても――――

――

「ダメだっ！ダメだ灰原ァ――――――――――ッ！！」

頬に流れている涙に気付かないふりをして、静かにその重い引き金を引いた――――。

そして、この現実の全ての始まりは、わずか数日前のことだった。

プロローグ（後書き）

遂に連載を始めてしまいましたっ！
あらすじにもあるように、結末は不明です。新志・新哀・コ哀どれにするかも分かりません。片想いのままかもしれません。いつもいつも無責任でスミマセン…。
でも、哀ちゃんの幸せの為に頑張りたいと思います。

1．片想い

「兄貴、来ましたぜ。」

一人のサングラスをした恰幅のいい男が、隣の長身の男にノートパソコンを向ける。
そこには赤みがかった茶色の髪をした、小学生の少女。

「…フン、間違いねぇな。まさかこんな無様な格好になっているとはな。」

ニヤッと口元を歪め、パソコン画面に映る少女を凝視する。
どれだけ探しても見つからないはずだ。まさか１８の女が子供に逆戻りするなんてことは、誰が想像するだろうか。

「しかし驚きやしたね。ほんとに幼児化してるとは…。」
「ああ。研究班の奴らからの報告がなけりゃ、見つけられなかっただろうさ。」

奴が組織を裏切ってもうすぐ1年が経つ。
逃げ隠れをする自由な時間は、裏切り者としては随分と長すぎだ。

「……歓迎するぜ。なぁ、シェリー。」

＊＊＊

「じゃあねー。コナン君、哀ちゃん。」
「灰原さん、コナン君、また明日。」
「またなー。コナン、灰原。」

いつも元気な3人組と別れ、工藤君と二人で家までの道のりを歩く。
毛利探偵事務所に向かう曲がり角までわずか数分の距離。でもそのわずかな時間が私は好きで大切だった。
特別おしゃべりではない二人、一言も会話を交わさず別れることもしばしば。だが、そんな沈黙も工藤君となら心地良い。

いつの間にか好きになってしまった人。
でもその彼の心には、別の人が既に居た。

黒い艶やかな長い髪をなびかせ、太陽のような眩しい笑顔を振りまく彼女。
誰にでも優しくて、どこか姉に似た人。

彼女も彼のことが好きで、誰から見てもお似合いの可愛らしいカップルだ。
お互い恋には随分と奥手で、恋人同士になってはいないけど。
でも、二人がそうなるのも時間の問題だろう。
そして彼らの周囲も、それが昔から決まっていたかのように、当然だという感じで祝福するのだろう。

だから知っている。
この大切な時間に、終わりが来ることを。
今私の隣にいる彼が、いずれ私の元を去ってしまうことを。
そして彼を想う気持ちにもこの時間にも、ピリオドを打たねばならないのは他の誰でもない、自分自身だということを――――…。

「灰原？」
工藤君の声にハッとして、何？と返事をする。
随分と物思いにふけっていたようだ。
「…なんか考え込んでいたみて―だけど。何かあったのか？」
この人は誰かれ構わず優しい。時にはその優しさも罪ってことを知っているのかしら？
「いいえ、何でもないわ。少しボーっとしていただけよ。」
「また夜通し研究をしていたのか？あんまり無理すんなって言っただろ？」
「大丈夫よ。身体の自己管理くらい出来てるわ。」
ったく可愛くねー奴、と半目で私を睨みながらブツブツと文句を言っている彼。
…そんなの言われなくても分かってる。
素直じゃなくて捻くれてて、物事を斜めからしか見られない歪んだ性格。

彼にとっての可愛い女の子って、
素直で、
泣き虫で、
怖がりで、
いざという時に頼ってくれる。

そんな感じなのでしょうね。
私とはまさに正反対。きっと、彼の中で私は「女」というカテゴリーに含まれていないのだろう。

『助けて！新一っ！！』
『私、新一を信じてる。』

彼女ならきっとこう言うのだろう。
何かあった時でも、ひたすらに彼を信じながら彼の助けを待つのだろう。

私には出来ない。
そもそも彼とは本来、薬の加害者と被害者の関係だ。甘えるなんて許されない。
だから女として見られなくても、今の乾いた関係が丁度いいのだ。

「ねぇ、今でも蘭さんのことが好き？」
「……はっ？い、いきなり何言い出すんだよオメ―。」
顔を真っ赤にしながら慌てふためく彼。口に出さなくても、全身で好きだと言っているようなものだ。

フフッと口元を緩め、いつの間にか止まっていた足を再び前に動かす。
曲がり角まであと少し。

女として見られなくても。
いつか別れることになっても。

私は彼の為に全力で出来ることをする。
彼の幸せの為に、必ず解毒剤を完成させる。
彼に身の危険が迫ったら、私が絶対に守って見せる。
だってこれが素直じゃない私に出来る、精一杯の愛情表現だから…。

「じゃあ、工藤君。また明日ね。」

そして帰り道の幸せな時間を過ごした後、今日も彼の為に研究に没頭する。

2．気持ちの行く先（前書き）

蘭ちゃんファンにはちょっとばかり厳しい内容かも。
ファンの方はｂａｃｋして下さい。

2．気持ちの行く先

「何だぁ？灰原のヤツ。いきなり変なこと言いやがって…。」

灰原と別れて、探偵事務所までの道のりを一人で歩く。
あいつの意味不明な言葉はいつものことだが、今日は何だか様子が違うような気がした。

『ねぇ、今でも蘭さんのことが好き？』

…どうしてあんなことを聞いたのだろう。
灰原が蘭に対して、罪の意識を感じていることは知っている。
蘭が俺のことで泣いているのは、自分のせいだと思っているんだ。
確かにあいつが作った薬で、蘭と離ればなれになったのは事実だ。
でも逆にあいつの薬が無ければ、俺はとっくに別の方法で殺されてしまっていただろう。

ＡＰＴＸ４８６９が、一体何の目的で作られていたのかは分からない。だが研究途上で、偶然毒薬となってしまったものを勝手に持ち出し使用したのは、ジンやその他の組織の奴らだ。
灰原はその使用に反対していたと言うし、明美さんがある意味人質となっていた当時は、強く抗議も出来なかったのだろう。
それなのに薬の製作者である自分のせいだ、とあの小さな背に全て

の責任を背負い込んでいる。

そんなに自分を責めなくていいのに。
もっと俺や博士を頼ったらいいのに。

何だかそんなことを考えていたら胸がズキンと痛くなって、ふうッと小さく溜息をついた。

「コナンくーん！」

自分を呼ぶ声がして後ろを振り向くと、笑顔で手を振る蘭がいた。

「蘭姉ちゃん、今帰りなの？今日はちょっと早いね。」
「そうなの。今日は部活が無かったから早く帰れたの。」

早く帰れたから、今日の夕飯はいつもより手間をかけておいしいの作るからね！
わぁーい！僕、蘭姉ちゃんのご飯、何でも好きだよ。
そんな他愛無い会話を交わしながら、二人並んで歩きだす。

蘭は確かに俺のことで泣いていることもあるが、蘭には話を聞いてくれて、いつでも相談に乗ってくれる親友がいる。
俺が言うことじゃないと分かってはいるが、蘭はどれだけ泣いて落ち込んでいたとしても、周囲にフォローしてくれる友人や家族がいるんだ。それに、「コナン」としての自分を本当の弟のように可愛がり、時には頼りにしてくれてることも感じている。
そういった意味では、蘭はホントに幸せ者だ。

だが、灰原はどうだろう。
小さい頃から孤立無援の生活をしてきて、唯一の心の拠り所であった明美さんまでもが奪われた。
幼児化して組織を抜け出し、（命を狙われているとはいえ）初めて普通の生活を送ることが出来るはずの現在でさえ、解毒剤の製作の為に研究漬けの毎日だ。これじゃあ、きっと組織にいた頃と変わらない。
俺や博士のことを信頼してくれてはいると思うが、肝心な所であいつは自分で全てを背負い込む。
自分のせいで他人が傷つくのを一番恐れているし、相変わらずの自己犠牲精神で、自分の命を軽視する。

本当は泣きたいはずなのに涙を見せない。
怖いはずなのに、何でもない顔をして強がってばかりいる。

そんな灰原の様子に気付く人はいるはずもなく、正体を知っている俺にさえ甘えることをしない。

一体、あいつの涙は誰が拾ってくれるんだろうか……。

何も出来ない自分に苛立つ。
そのうち、あいつは壊れてしまうんじゃないか。
俺の前に突然現れた時のように、突然消えてしまうんじゃないか。
そんな思いが頭を離れない。

「最近、新一から連絡が無いの。何やってるのかしらね？あの推理オタクは。」

蘭が突然、工藤新一の話題を振って来た。時々蘭は、こうやって工藤新一の話をする。
自惚れではないが、よほど俺（新一）の話をするのが嬉しいらしい。
新一は、新一は、と飽きもせずによく喋っている。きっと蘭自身も無意識なのだろう。

――――そういや最近、新一として電話してなかったな。気が付いたら、灰原のことばっかり考えているからな――――…。

正直、新一として電話をするのは疲れる。
本当のことは何も言えず、嘘に嘘を重ね続けるばっかりだ。
電話越しに泣かれたり、「帰ってきて」なんて言われたりすると、大きな罪悪感に襲われる。
そしてその後に、コナンとして何でもないふりをするのは辛いんだ

……。

それに以前、蘭から

『コナン君が新一だったら良かったのにね。』

と言われたことがあった。結局、蘭が求めているのは江戸川コナンじゃない。

工藤新一なんだ。

あの時は、蘭を慰めようと必死だったから何も思わなかったが、今思うと新一＝コナンということを知らない蘭が、コナンという1個体の存在を否定してしまったようなものだ。

それだけ蘭は、工藤新一を求めている。

「ごめんな、蘭。」

誰にも聞こえないくらいの小さな声で、今も楽しそうに笑う蘭にそっと謝った。

2．気持ちの行く先（後書き）

「コナン君が新一だったら良かったのにね。」というセリフは、ずぅーっと引っかかっていました。だって、新一さえいればコナンという存在は必要ないっていうことですよね？
いくら新一が大好きだからって、それを言っちゃいけないでしょー（T＿T）

3．待ち人

カリカリと、シャーペンの動く音だけが響く室内。
机の上のライトだけを点けて、手元の教科書とノートを明るく照らす。
苦手な数学は、数字を見ているだけでも頭が痛くなりそうだ。

『新一、ここはどうするの？』
『オメー、これくらいも分かんねーのか？これはだなぁ…。』

ふと、新一との会話を思い出す。
いつもなら、分からない所があれば新一に勉強を教えてもらう事が出来た。軽く嫌味を言いながらも、私が理解できるまで丁寧に教えてくれていた。

「新一…。」

一旦集中が途切れると勉強が手に付かなくなり、仕方なく明日の予習は諦めることにして教科書を閉じた。結局、分からない所は分からないままだ。

ハァッと大きく溜息をつく。

目につくのは、最近新一からの着信が無い携帯電話。1か月ほど声も聞いていない。
彼からの着信を心待ちにしながら、期待を裏切られる毎日。

今どこにいるの？
今何をしてるの？
いつになったら帰って来るの？
私のこと、心配じゃないの？
私はこんなに貴方に会いたいんだよ…？

「会いたいよ。新一……。」

＊＊＊

新一が突然いなくなってもうすぐ1年。その間に変わったこともいくつかある。

私は高校3年生に進級し、受験生の立場になった（新一は戻り次第、進級試験を受けることになっているらしい）。
私のお父さんは売れない探偵だったのに、ある日を境に、何故か急に名探偵となってしまった。今では「眠りの小五郎」として活躍している。

いつも元気一杯な少年探偵団は、小学2年生になった。
相変わらず好奇心旺盛で、探偵のお父さん並みに事件に巻き込まれている。

そんな時、目につくのがこの二人。

まずは江戸川コナン君。
新一がいなくなってから突然現れた、小学生の可愛い男の子。
新一によく似た顔に、サイズの合っていない大きな黒ぶち眼鏡。いつもニコニコして愛想がよく、少年探偵団を始めとするみんなの人気者。
事件となると自ら顔を突っ込み、刑事さん達も気が付かないような証拠を見つけたり、事件解決へつながるヒントをさりげなく出したりする。

何度か、コナン君は新一じゃないかと疑ったこともある。

小学生らしからぬ知識と行動力。サッカーが上手なところや、口元に手を当てて考え込む仕草なんて本当にそっくり。
でも疑うたびに、コナン君＝新一じゃないというような出来事があったりして、一応疑惑は晴れていた（大体、大人が子供に戻るなんてありえないことだしね）。

そしてもう一人は灰原哀ちゃん。
いつも冷静沈着で、一歩離れたところでみんなを見守っている。
この子もコナン君に負けないくらいに頭が良いらしく、気が付くとコナン君の隣で何かを話し込んでいる。そんな時は、二人とも大人

顔負けの真剣な表情をしていて、誰も立ち入れない雰囲気があった。話のレベルが合うのだろう。真剣な表情とは裏腹に、話そのものを楽しんでいるような感じがあり、実際、その会話についていけるものはほとんどいない。

あの二人を見ていると、何故か胸がキュンと痛くなる。

あの二人を自分の立場に置き換えてしまうからだろうか。
弟みたいなコナン君を、哀ちゃんに取られてしまったと感じてしまうからだろうか。

それとも。

それともやっぱりコナン君は――――――？

そして哀ちゃんもひょっとして――――――…？

時は同じ頃、米花町某所。

「いよいよですね、兄貴。」
「…ああ。やっと狩りができる。」

黒ずくめの服に身を固めた大男が二人―――ジンとウォッカの視線の先には、現在真っ暗に静まり返っている毛利探偵事務所。

「シェリー、全てはお前のせいだ。」

くわえた煙草が短くなり、その吸い殻を地面に投げ捨て、思い切り踏みつける。

「所詮、堕天使の娘は堕天使、か……。」

3．待ち人（後書き）

哀ちゃん至上主義の私が書く蘭ちゃんは、どうしても依存心が強くなってしまいます…。ごめんなさい、蘭ちゃん。

4. 失踪

「ねぇ、おじさん。蘭姉ちゃん遅くない？」

現在夜7時。
梅雨も間近というこの時期、決して暗くはない時間帯だ。だが、いつもならとっくに帰宅していて夕飯の支度をしているはずの蘭が、連絡もなしに遅くなることはほとんどない。

「どーせ部活か、園子と一緒に買い物でもしてるんだろ。」
「でも、全然連絡がないんだよ。」
「じゃあ、携帯に連絡してみればいいだろ。」

ったく、これからテレビにヨーコちゃんが出るんだから、邪魔すんじゃねーよ。…と、名探偵であるはずの毛利小五郎は、全くもって気にしていない。

――てか、あんたの娘だろーが。

沖野ヨーコちゃんに夢中のおっちゃんは無視して、取り合えず蘭の携帯に連絡してみることにする――――が、つながらない。電源が切られているようだ。

…何だか嫌な予感がする…。

「おじさん！僕ちょっと探してくるよっ！」

おいっ、コナン！！というおっちゃんの声が聞こえたが、そのまま外へ飛び出した。

探偵事務所から帝丹高校までの道のりや、蘭がよく行く本屋、雑貨屋、スーパーなどを覗いたが、一向に蘭は見つからない。既に辺りは暗くなっており、時計を見ると８時を過ぎていた。

「…ハァハァ、どこにいるんだよ…。」

雨が近いのか、少しジメッとした空気がまとわりついてうっとおしい。
時間的にも、小学生の男の子が一人で走り回るのはそろそろ限界だろう。時折周囲の人の視線が痛い。警察に連れて行かれても面倒だ。
このまま闇雲に探しても見つからないと判断し、一旦事務所へ戻ろうとした時、ポケットに入れていた携帯がブルルッと震えた。
急いで携帯を取り出すと、そこには「灰原哀」の文字。

「…灰原か？ワリ―けど今は…『蘭さんの居場所が分かったわ。』

…はっ？今何て言った？

「オメー、なんで…。」
『とにかく、すぐに博士の家に来てもらえないかしら。詳しいことは来てから話すわ。』
じゃ、待ってるわね。と用件だけ伝えた灰原は、そのまま電話を切った。

背中にツーっと冷たい汗が流れる。

何故蘭がいなくなったことを灰原が知っている？
何故蘭の居場所を灰原が知っている？

最悪な事が起きたのではないかという予感がして、俺はギュッと携帯を握りしめ、博士の家まで走って行った――――――。

5．哀しい決意

阿笠邸には、緊迫した雰囲気が漂っていた。

「な…んだっ…て…？」

「だから貴方の言う黒の組織に連れ去られたのよ。蘭さんは。」

目の前の彼は、目を大きく開いたまま固まってしまっている。そりゃそうだろう。私は今、彼にとんでもないことを告げたのだ。

阿笠博士は私達から一歩離れたところで、心配そうにこちらを見守っている。

部屋の中はそれなりに涼しかったはずなのに、額にじっとりと汗が滲む。心臓はさっきからうるさいくらいにバクバク言ってるし、両手は細かく震えている。

それでも彼にはそんな姿を見せたくなくて、グッと両手を握りしめて冷静さを装った。

「考えられることはただ一つ。バレたのよ。奴らに私達の正体が。」

＊＊＊

「博士ー。夕飯出来たわよ。」

この家に来てから、私が家事の一切を取り仕切っている。解毒剤の開発はもちろんのこと、博士の健康管理（特に食事のコントロール）も私の密かな使命となっていた。
今日も食卓には、和食中心の低カロリーメニューが並んでいる。

「たまには肉も食べたいのう…。」
「フフッ。博士、生活習慣病って怖いのよ。…でもそうね、逆にストレス太りしたら困るし、明日は久々にお肉料理にしましょうか。」
「本当かの？そりゃ楽しみじゃのう。」

いただきます、と二人一緒に食事をする。お互いどんなに研究が忙しくても、食事だけは一緒に摂るようにしていた。その日にあったことを報告したり、研究の進み具合を話したり、食事の間も話題は尽きない。
…というか、ほとんど博士が喋っているのよね。

組織にいた頃は、いつも一人で食事をしていた。
それが当たり前だったから別に寂しくはなかったし、食事も単に必要だから摂るという感じだった。
まさか、こんなに穏やかな気分で食事をする時が来るなんて。

「どうかしたかの？哀君。」
「…いつもありがとう。博士。」

私の言葉にきょとんとした博士が可愛らしい。
何だか哀君に褒められると照れるのうと、ニコニコする博士。
博士の顔を見ると、胸の中がじんわりと温かくなってくるのが分か

る。
よく工藤君に「ホントの親子みたいだな」なんて言われたりしていたけど、確かに私にとって博士はかけがえのない人だ。この人がいなければ、私は今頃ここにはいられなかっただろう。

食事を終え後片付けも済ませると、解毒剤の研究をすべく地下室に向かった。
いつも通りにパソコンを起動させ、モニター一杯に並ぶ化学式と格闘しようか…という時に、１通のメールが届いていることに気付いた。

「……っ！」

嘘…っ！なんで……！！

一気に心臓が走り出す。全身から冷汗が流れ出し、ブルブルと身体が震えだした。
これまでの穏やかな気分から一転、大きな恐怖が襲ってくる。

裏切り者Ｓｈｅｒｒｙ

毛利蘭は既に我々の手の内にある
選択肢は二つ
組織に戻り命を差し出すか
見殺しにするか

＊＊＊

「…なんで蘭を…。」

「貴方の正体がバレた時点で、きっと蘭さんを人質にすることを決めていたのでしょうね。貴方にとって一番影響力があり、且つ精神的動揺を与える人物…。」

私だけ正体がバレたのなら、きっと直接ここに乗り込んで来ていた。でも私に協力する工藤君の存在に気付き、更にその人物が私と同様に幼児化していると分かったのなら、その存在に興味を覚えるはず。そしてどこまでも残酷な奴らは、私達が一番恐れる方法で接触を図って来たのだ。

だから蘭さんがターゲットになってしまった。

「……ごめんなさい。私が関わったばっかりに、貴方の大事な蘭さんが狙われてしまった。全ては私の責任…。」

「灰原…。」

「蘭さんはまだ無事なはずよ。殺そうと思えばその場で殺していたはずだもの。蘭さんは私をおびき出す為の道具にすぎないわ。」

そう、私が組織に戻れば済むこと。

いくら私に関わったからといっても、警察に強力なコネクションを

持つ工藤君には、組織と言えども迂闊に手を出せないだろうし、ＦＢＩとも手を組んでいることは調査済みだろう。それに彼の父親は、ＩＣＰＯとも繋がりがあるそうだ。
私が組織に戻り、工藤君に組織から手を引かせれば、奴らは私と関わった人達のことを諦めてくれるかもしれない。

甘い考えとは分かっていても、今の私には希望が必要だった。
もう、私のせいで誰かが傷つくのは嫌だから…。

「…灰原、お前何考えて…。」
「工藤君。蘭さんは私が責任もって貴方の元に返すわ。」

今度は私が貴方達を助ける番。
ホントは憎まれてもおかしくないはずの私を、いつも命がけで守ってくれたから。
だから今度は私が貴方を――――――。

お前まさか一人で乗り込む気じゃ…と詰め寄る工藤君に、隠し持っていた予備用の時計型麻酔銃を撃ち込んだ。私の突然の行動に反応出来ず、その場に彼が崩れ落ちていく。

「は…いば…ら……。」

吸い込まれるように澄みきった彼の蒼い瞳は、ついに瞼の裏に隠れ、誰もその瞳に写さなくなった。

「…ごめんなさい。工藤君…。」

これから貴方を裏切る私を、どうか許さないで……。

5．哀しい決意（後書き）

裏タイトル「哀と博士のラブラブ親子愛」（笑）

6．愛されるということ

眠り込んだ新一をソファーに横たえ、上から毛布をかけてやる。
静かなリビングにかすかに響く穏やかな息づかいとは裏腹に、新一の寝顔は何やら苦しそうじゃった。

「…本当にいいのかね？哀君。」
「ええ。もう決めたことなの。」

目の前の哀君は、眠っている新一の顔をずっと見つめておった。
恐怖心でいっぱいじゃろうに、そんな姿は少しも見せない。
そんな哀君が、痛々しくて仕方なかった。

＊＊＊

「ＡＰＴＸ４８６９は、組織の要なの。」

新一が来る前に、哀君が話してくれた哀しい決意。
それは蘭君と引き換えに、哀君が組織に戻るという危険なものじゃった。

「私が組織を抜けて以来、ＡＰＴＸの研究は滞っているはずよ。自分で言うのもなんだけど、今組織に残っている研究班では、私以上の開発は無理だと思うわ。」

ＡＰＴＸに関しての詳しい話は出来ないけれどね…と、寂しそうな顔でポツリポツリと話す哀君。
ただでさえ小さな身体が、いつもよりも余計に小さく見えた。

「組織は『裏切り者には死を』というのが鉄則だし、実際に私の命を狙い続けていたけれど、私がいなければＡＰＴＸ４８６９の研究は進まない、ということに気が付いたんでしょうね。でなきゃ蘭さんを捕まえて、私をおびき出すなんてまどろっこしいことしないでしょうから。」

今だけは、自分の頭脳に感謝しなきゃね。

「私が組織に戻り薬の研究を再開すれば、私を逃がしたくない組織は迂闊に私の周囲に手を出したりしないと思うわ。工藤君自身に日本警察やＦＢＩとの繋がりがあるし、組織から手を引きさえすれば、奴らは大きなリスクを冒してまで手を出そうとはしないでしょう。」

「じゃが、哀君が安全だという保障はどこにもないんじゃないのかね？それに新一が簡単に諦めるとは思えんのじゃが…。」

新一の正義感は、たとえ自分の命が危機に晒されようとも、そんなことで揺らぐようなちっぽけなものじゃないと知っておる。
一旦関わってしまった事件は、それが解決するまで突進していくのが新一じゃ。
それに自分と深く繋がっている人物のことなら尚更じゃろう。

「…そうね。工藤君なら諦めないでしょうね。でも、大事な蘭さんが危険に晒されてしまった以上、工藤君だって派手な行動は出来ないって分かってるはずだもの。」

そう、それに

「工藤君の第一目標は、自分の身体を元に戻すこと…。つまりＡＰＴＸ４８６９の解毒剤なのよ。組織に戻りさえすればデータもあることだし、解毒剤の開発も容易だわ。」

…果たしてそうじゃろうか。

もちろん解毒剤も大切じゃが、新一は組織を壊滅させて、そのしがらみから哀君を解放することを第一に動いていたようにも見えたんじゃが。

「だから私は…再びシェリーに戻るわ。解毒剤を完成させて工藤君が元の姿に戻りさえすれば、全ては元通り。…そう、初めの状態に戻るだけ。」

だから平気よ。私は大丈夫だから……。

そう言う哀君の顔は、今まで見た中でも一番綺麗な…そしてどこまでも哀しい笑顔じゃった。

＊＊＊

「哀君。奴らの居場所は分かるのかね？」

「…ええ。送られてきたメアドがその場所を示しているの。工藤君には言ってなかったけど、割と近い所に組織の施設があるのよ。」

工藤君に言ったら、後先考えずに突っ込んでいきそうだから言わなかったの。もちろん、メールも削除しちゃったわ。

「やっぱり哀君、ここはジョディ先生達に相談した方が…。」

「ダメよ。そんなことをすれば蘭さんへの危険が大きくなるだけだわ。」

「……。」

じゃが哀君。

本当に君が言う通りに事が進むかどうかは分からんのじゃ。

……哀君だって、自分の予測は希望的観測にしか過ぎんと分かっておるんじゃろう…？

「……博士？」

急に黙り込んだワシを心配したのか、俯いたワシを覗き込んでくる哀君。

ワシの、大事な、大事な……一人娘。

「…やだ、博士。何泣いて…。」

突然のことに驚き、困惑する哀君。ワシの愛しい、愛しい――――…。

「哀君は、ワシの大事な娘じゃ。」

流れ出した涙は止まらない。それでも涙でいっぱいの瞳で、哀君の顔を見つめる。

行ってしまう哀君には言わなければならん。
自分を犠牲にすることしか、与えることしか知らない哀君。
組織にいた頃は恐らく、愛されることを知らんかったじゃろうし、姉以外には愛されることもなかったんじゃろう。

それでも。

それでも現在（いま）は、哀君のことを大切に想っている人がたくさんいることを。
哀君の為に泣いて、笑って、喜んで、悲しむ人がいるということを。
哀君は、たくさんの人に愛されているということを……。

「血の繋がりなんて関係ないんじゃ。」

目の前の哀君の顔が、だんだんと歪んでくる。
色素の薄い大きな瞳から、一粒、二粒と綺麗な涙がこぼれ出した。

「君がここに来た時から、君はワシの自慢の娘じゃよ。…そしてこの家も君の家じゃ。」
「……は、かせ……。」
「哀君の居場所はちゃんとここにある。帰ってくる場所もここじゃ

よ。」

唇を噛みしめながら必死に泣くのを我慢しようとする哀君を、そっと包み込んだ。

…親の前で、泣くことに耐えなくてもいいんじゃよ。

「君の為に何も出来ん不甲斐ない父親を、どうか許しておくれ……。」

君を見送ることしか出来んワシを許しておくれ。

「…っ、博士っ！」

ワシに縋りついて大声をあげて泣く哀君の背を、いつまでもいつまでも撫で続けた…。

哀君。ワシは信じておるよ。

再びまた、生きて君に会えることを。

君がここに帰って来ることを。

それに。

それに新一が、必ず君を救いだすことを――――――。

6．愛されるということ（後書き）

博士視点のお話でした。博士視点って難しい……。
何だかやけにダラダラになってしまって、自分ではちょっと納得していないのですが、これ以上の修正は無理でした（T＿T）しかも考えてた終わりに到達しなかった…。
まぁとにかく、哀ちゃんはこんなにも博士に愛されているんだよ、ということが分かってもらえたら嬉しいです。

7．手紙

「ん…、ここ…は……？」

だんだんと開けてくる視界に、見覚えのある天井が飛び込んできた。視線を動かすと、壁掛け時計が１１時２０分過ぎを指している。周りの様子からして夜らしい。

…博士の家……？

何だって博士の家に……。

「…新一、気がついたか？」

「……博士。」

ぼーっとした意識のまま起き上がる。どうやらソファーで眠りこけていたようだ。

……ソファーで……？

「！！」

そうだ。

俺はいなくなった蘭を探してて、途中で灰原から電話が入って。それで組織に正体がバレて、蘭が狙われたとか何とか…。

それで……、それで灰原は何と言っていた――――？

「博士っ！灰原はっっ！？」

目の前の博士は瞳を真っ赤にして、苦しそうな、それでいて寂しそ

うな、何とも言えない表情をしていた。
こんな顔の博士は初めてだ。
もちろん、灰原の姿はどこにも見えない。

「博士っ！！」

一言も発しない博士に、つい苛立ったまま声を上げる。
すると博士は、スッと俺の前に何かを差し出した。

「これ…。」
「哀君からじゃ。」

差し出されたのは、「工藤君へ」と綺麗な字で書かれた一通の淡いブルーの封筒。
…灰原の字だ。
すぐに中を開けると、やはり淡いブルーの一枚の便箋。

工藤君

貴方には、今までたくさんの迷惑をかけてしまったわね。
どれだけ謝っても足りないけれど、でもきっと貴方は、そんな言葉は望まないだろうから。

ありがとう。

今まで私を守ってくれてありがとう。
加害者である私に、優しくしてくれてありがとう。
私、幸せだった。

蘭さんのことは私に任せて。
必ず、貴方の元へ無事に返すから。

私はＳｈｅｒｒｙに戻ります。
裏切りととって貰っても構わない。
でも、解毒剤は必ず届けるわ。

だから、
貴方は組織から手を引いて下さい。
組織のことは忘れて下さい。
そうすれば、貴方達は普通の生活に戻っていけるわ。

もう二度と会うこともないでしょうけど……もし会ってしまったら、
次は敵同士ね。
その時は、願わくば貴方に捕まえて欲しいわね。

博士や探偵団のみんなの事、よろしくね。
蘭さんを大事にするのよ。

灰原哀

「……灰原…。」

思わず手紙を持っていた両手を握りしめると、グシャッと乾いた音がした。
皺一つなかった手紙は、持っている部分を中心に細かい皺が出来ている。

「スマン、新一。ワシには哀君を止められなかったんじゃ。」
「分かってる。博士が悪いわけじゃないさ。」
博士も随分泣いたのだろう。大きな身体のはずなのに、心なしかやつれて見える。
博士にとっては、灰原は娘同然の存在だ。その娘が、危険と分かっている所へ行くのを見届けなければならなかった苦痛は、想像を絶するものだったんだろう。

灰原、オメーバカだな。
俺が簡単に手を引くなんて、本気で思ってんのか？
正体がバレちまったんなら、ここは一気に奴らを叩くしかないだろう？
お前だって、本当は分かってるんじゃねーのか？
それに…それに本当は、救って欲しいんだろう？
…捕まえて欲しいって、本当はそういう意味なんだよな？
俺は、誰よりも灰原を見てきた自信があるんだ。
この手紙が本心かそうじゃないかってことぐらい、簡単に見抜けるさ。
ましてや大事な奴がピンチなら、助けに行くっつうのが男だろ？
…大事な奴…？
「……。」

「新一？どうかしたか？」
「あっ、いや…。」

無意識に灰原のことを「大事な奴」なんて思っちまったけど、…そりゃそうだよな。
あいつは「運命共同体」で「相棒」だし、大事な奴には変わりねーよな。

…なんだ？この違和感。

何だか胸の中がモヤモヤとした気分だったが、今はそんなことを気にしている場合ではない。
こうしている間にも、蘭と灰原の身に危険は押し迫ってるんだ。

「博士。俺が眠っている間のことを話してくれ。」

無理やり気持ちを切り替え、俺は博士の話に聞き入った。

8．心配（前書き）

２話一気に更新しました。
前話と一緒にどうぞ。
※６／１９ほんの一部修正しました。内容には変更ありません。

8．心配

その頃毛利探偵事務所には、数人の見知った刑事達が訪れていた。

「家に英理を呼んで、私も探しに行きましたが、どこにも…。」

「あなた…。」

かなり探し回ったのだろう。

着ているスーツは乱れ、整えられていた髪もボサボサになっていた。

ソファーに深く座りこみ、俯く姿が痛々しい。

「…何か連絡はなかったのかね？身代金の要求とか…。」

「いいえ。そんな連絡は一つもありませんでしたわ。」

目暮警部の問いに、すかさず英理が答える。

こちらもかなり憔悴しきった顔をしていた。

「蘭の友達にも片っ端から連絡しましたが、誰も行方は知らなくて…。」

今まで堪えていた涙が溢れ出した。隣の小五郎が英理の肩を抱き寄せる。

「あのっ、そういえばコナン君は…？」

「コナンなら蘭を探しに行った後、博士の家にいると博士から連絡があったんだ。しばらくは預かって貰うように頼んどいた。」

「コナン君も落ち込んでいるんでしょうね…。」

目暮と共にやって来た佐藤・高木両刑事。二人とも蘭のことはよく

知っているということもあり、居なくなったと聞いてかなり心配している様子だった。

「考えたくはないが、やはり誘拐か…。」

今日は、この辺りで事件や事故が起こったという報告はない。
何らかの事件に巻き込まれたとしても、そういった通報はおろか、目撃者すらいない状況だ。
もちろん、蘭が自分で姿を消す理由はどこにもない。
一切の連絡が無いのは気になるが、やはり誘拐されたとみて間違いないだろう。

「毛利君。とにかく我々の方でも動いてみるから、君達はここで待機しといてくれ。」
「警部殿！私も一緒に…。」
「いや、君はここにいてくれ。英理さん一人じゃ心細いだろうし、今の君には冷静な判断が出来んだろう？」
「……。」
「相手がどんな目的で蘭君を連れ去ったのか分からん現状では、公開捜査も出来んだろう。ここは我々に任せて、君達は少し休みなさい。」
「……よろしくお願いします。」

こうして日本警察は、毛利蘭の行方を探す為に動き出した。
しかしこの翌日、この誘拐騒動は思わぬ展開を見せることとなる。

8．心配（後書き）

激短ですが、区切りがいいので切りました。
ようやく話が動きそうです…。

9．発見―閉ざされた記憶―（前書き）

６／１９前話を一部修正しました。内容に変更はありません。

9．発見―閉ざされた記憶―

「なにぃっ！？蘭君が見つかった？」

捜査一課に響く目暮警部の声。蘭の行方が一向に掴めず焦りの表情を見せていた刑事達の耳に、信じられない内容の声が飛び込んできた。

「……ふむ。杯戸中央病院に運ばれたんだな。それで怪我は？……分かった。すぐにそちらへ向かう。」

電話を切る目暮の元に、話を聞いていた刑事達が一斉に集まって来た。

「警部！蘭ちゃんが見つかったって本当ですか？」

「それで、蘭さんの状態は…？」

早く話を聞きたい佐藤と高木が矢継ぎ早に口を開く。見つかったという安堵感と、行方の手がかりさえ掴めなかった蘭が、あっさりと発見されたという胡散臭さに複雑な表情をしている。

「蘭君は東京近郊の山中で、気を失った状態で発見されたそうだ。特に大きな怪我はないそうだが、念の為に杯戸中央病院へ運ばれたらしい。…まだ目覚めておらんみたいだ。」

集まった刑事達にホッとした表情が広がった。

取りあえず蘭が大した怪我もなく無事に見つかったというのは、不幸中の幸いといったところだろう。

犯人については何の手がかりもないが、蘭が目覚めれば何か分かる

かもしれない。
「毛利君に誰か連絡を取ってくれ。佐藤と高木は一緒に病院へ向かうぞ。」

「ん…。」

辺り一面の白い壁。鼻先に広がるツンとした消毒液の匂い。

「蘭、気がついたか？」
「痛いところはない？」

目の前には両親の顔。二人とも泣きそうな顔をしている。

「…お父さん。お母さん。」

どうやらここは病院のようだ。
何だか分からないが、私は二人に心配をかけているらしい。
二人の泣きそうな表情が辛くて、凝り固まった顔を無理矢理動かし笑顔を作った。

「良かった。無事で…。」

お母さんの瞳に涙が光っている。…私は何かしでかしたのだろうか？必死に思い出そうとするが、頭の中に霧がかかったみたいでうまく思い出せない。

ふと視線を移すと、壁際に目暮警部と佐藤刑事、高木刑事が立っているのが見えた。３人ともホッとした表情を浮かべている。

「…蘭君。身体の調子はどうかね？」

「特に…、悪くはないですけど…。」

目暮警部にそう返しながら、ゆっくりと起き上がる。

蘭、大丈夫？とお母さんが支えてくれたが、多少身体がだるく感じる以外、別に悪い所はない。

「さっそくだが、君の身に起こったことを我々に話して欲しいんだが。」

さっきまでの微笑んだ表情から一変、真剣な顔をして私を見ている目暮警部。佐藤刑事も高木刑事も仕事の顔をしていた。

……私の身に起こったこと？

「…あの、目暮警部。私の身に起こった事って何のことですか？というか、何で私病院にいるの？」

私の頭の中は？マークでいっぱいだ。

何故自分が病院にいるのか。

何故両親がこんなに心配そうな顔をしているのか。
何故目暮警部が私にそんなことを問うのか。

「もしかして蘭ちゃん、自分の身に何が起こったのか覚えてないの？」

恐る恐るというような感じで佐藤刑事が尋ねてきた。

「…何のことを仰っておられるのか、私にはさっぱり…。」

病室の空気がハッと緊張感に包まれたみたいだった。
どうやら私の身に、何かが起きたということだけは予想できた。

「あの、何が起きたか教えて貰えませんか？」

お父さんや目暮警部に教えて貰って分かったこと。

どうやら、私は昨日の学校帰りから行方不明となっていたらしい。
誘拐されたのではないかということで、目暮警部達が私の行方を探していたが、手がかりが全く掴めなかったそうだ。
それが今日になって、どこかの山中で私が倒れていたのが発見され、病院に運ばれた。

――――全く記憶にない。

私の記憶は、日付からするとたぶん一昨日の学校で、園子と今度の休日に買い物へ行こうと計画している所で途切れている。

そう、ここ1～2日の記憶がないのだ。

思い出そうとするとこめかみにズキンと痛みが走り、それを邪魔しようとする。

頭の中はやっぱり霧がかかっているみたいで、その先がどうしても見えない。

でも、何か大変なことが起こったような気が――――――

「では蘭君。思い出したらでいいから、何か分かったら連絡をしてくれるかね？」

そう言い残し、目暮警部達は少しがっかりしたような表情で帰って行った。

10．思い出と薬

「そうか。蘭は無事だったんだな。」

蘭の無事は、すぐさまコナンがいる阿笠邸にも届けられた。
ちなみに今日は土曜日で、学校は休みである。その為学校で大騒ぎになることは避けられた。

「じゃが、蘭君は何も覚えてないらしいがの…。」
「…覚えてないって？」
「ここ1日2日のことが、さっぱり抜けてるらしいんじゃ。」
「……。」

記憶喪失だということだろうか？
以前にも精神的ショックから記憶を失ったことがあったが、今回もそうなのだろうか？

「警察の方も手がかりは掴めていないと言うしのう。」

哀君のことも分からずじまいじゃ…と、寂しそうに囁きながらコーヒーを入れにいく博士。

そう。灰原哀の行方は分からないまま。
しかも相手が相手だけに、簡単に警察へ通報するわけにもいかない。
明後日には学校も始まるし、灰原の所在についての言い訳を考えなければならない。

…まぁ、灰原のことは既に一つ、とっておきの策を講じてはいるが。

「まずは、蘭の所へ行ってみるか…。」

＊＊＊

タクシーの中はしんと静まり返っていた。
運転手も私の様子に何らかを感じて、話しかけられないのだろう。
ちらちら、と時折こちらに視線をよこすのを感じてはいるが、私はあえて気付かない振りをして、ずっと真っ暗な外の景色を眺めていた。
だんだんと街の中心部から離れ、綺麗なネオンも遠ざかっていく。
大好きだった人達がいる米花町は、とっくに通り過ぎてしまった。

今見ている景色も、二度と見ることは出来ないかもしれない…。

膝の上にある小ぶりなバッグをギュッと掴む。
バッグの中には財布と、以前に少年探偵団のみんなで撮った写真が一枚。そしてこれまで研究してきた解毒剤のデータと、解毒剤の試作品が入った瓶一つ。更に、解毒剤とは別に研究を続けていたある薬が数錠。

博士の家から持ち出したのはたったこれだけ。
他のものは必要なかった。
持ち出す思い出が多ければ多いほど、きっと私のするべきことに躊躇してしまうだろうから。
これから私に訪れるであろう未来に、思い出は邪魔なだけ。
Ｓｈｅｒｒｙに戻る私に、灰原哀の思い出は不要だ。

…それでも写真を持ってきてしまった。
きっとこれは未練だろう。
つくづく諦めが悪い、と思う。

一人苦笑いを浮かべると、窓に映る自分の顔が目についた。
灰原哀の顔ではない本当の私、宮野志保の顔。
自分の顔なのに何だか見慣れないような気がして、更に苦笑する。

いつの間にか、灰原哀が当たり前になってたのね。

解毒剤を飲んだのは博士の家を出る前。
相手には灰原哀のことはバレているので、あえて宮野志保に戻る必要はなかった。
しかし、夜間に小学生の姿では、一人でタクシーには乗れないということと、もしかしたら……いや、必ず毛利蘭と顔を合わせることになるだろう、ということが頭にあった。そうなれば、灰原哀の姿

のままでは非常にマズイ。
そう考えたからこそ、解毒剤を飲まざるを得なかった。
一応、最悪の場合を考えてこの薬を持って来たのだけれど。

解毒剤とは違うもう一つの薬。
工藤君にも博士にも、誰にも内緒で研究してきた許されない薬。
こんな目的で使うことになるかもしれないとは、全くもって予想外だったけれど。

「仕方ないもの…。」

人として、許されないことかもしれない。
それでもあの優しい人達を守る為には、きっとこうするしか方法は無い。
私の勝手な我儘なのかもしれないけれど。

いつの間にか時計の針は日付を超えていた。
そろそろ工藤君は目が覚めたかしら？
今頃私の勝手な行動に怒っているかしら？
でもごめんなさいね。
これ以上私のせいで、大切な人達を失うわけにはいかないの。
失いたくないの。

これまで多くの人の命を奪ってきた私だけど、貴方達だけは何が何でも守りたい…。

「お客さん、そろそろ目的地の近くですけど。」

運転手の声にハッとして外を確認すれば、確かに見覚えのある景色だった。これ以上タクシーで近づけば、この運転手も命が危ない。

「ここでいいわ。ありがとう。」

お釣りはいらないから、と声をかけてタクシーを降りた。
無事にタクシーが走り去っていくのを確認する。

そして私はタクシーが完全に見えなくなってから、目的地に向かって歩き始めた。

１１．嫉妬と正体（前書き）

いつもより長くなっちゃいました。

１１．嫉妬と正体

歩き始めて数十分。ようやく目的の施設が見えてきた。

ここは子供の頃に何度か訪れたことのある研究所。私が関わった施設は全て焼かれてしまったと思っていたから、こうして残されているなんて少しばかり驚いた。
まぁ関わったと言っても、ここで私が研究をしていた訳ではないし、単に後学の為の見学のようなものだったから、証拠隠滅する必要はなかったのかもしれない。

表向きは民間の化学研究所。数年前に倒産という形でその活動は停止していた。
しかしその実、組織の施設として地下活動は行われていた。
住宅地からは随分と離れた所にあり、誰もその実態に気がつかない。

「まさか、こんな形で戻って来ることになるなんてね…。」

５階建ての古ぼけたビル。表からは人気も何も感じられない（まぁ、真夜中ということもあるだろうが）。
どこに行けばいいのかしら…なんて考えながら、ビルの周囲を歩いてみる。
不思議と、恐怖心は無くなっていた。それどころか、ぼんやりと懐かしささえ感じている。

――――やっぱり、黒は所詮、黒にしかなれないんだわ。

口元に自嘲した笑みが浮かぶ。灰原哀としての生活は、やはり私にとっては異常であったのだ。

幸せだと思っていた毎日は、幻。
犯罪者には似合わないあの光り輝く温かい日々は、もう二度とは戻ってこない――――。

「！！」

突然、あの突き刺さるようなプレッシャーを背に感じた。
この重苦しい、どんな思考も止められてしまうような冷徹な視線。

間違いない。

この気配は、

すぐに息さえも止められてしまいそうな殺気の持ち主は――――――

「……久しぶりだな。シェリー。」
「…ジン。」

振り向いた視線の先には、目隠しをされ、ロープで身動きが出来な

いように括られた蘭さんと、その蘭さんを更に拘束するウォッカ。
そして。
私を殺気だった冷たい瞳で見下ろす銀の長髪の男、ジンがいた。

「賢い選択だな、シェリー。自分から命を捨てに来たんだな。」
「…どうせ、研究の続きをしろって言うんでしょ？」
「…くくっ。やはりお前には分かっていたか。組織がお前の頭脳を欲しがっているのを。」
「ＡＰＴＸは、父から唯一引き継いだ研究だもの。私にしか進めることはできないわ。」
「やはりお前はバカじゃないな。賢い女は好きだぜ？……シェリー…。」
「…。」

全身を舐めまわすような視線がとてつもなく不快だ。
それに、さっきまで忘れていた恐怖心が蘇りつつある。

―――ダメよ。しっかりしなさい！宮野志保！！蘭さんの命は私に懸っているのよ―――！！
震えそうになる両手を握りしめた。

こんな奴らに弱さなんか見せられない。

「私は組織に戻る為に、ここにやって来たの。…わざわざ解毒剤を飲んでね。だから、さっさとその女性の身体を離してもらえないかしら？」

わざと強気に言ってみる。大丈夫、声は震えていない。

するとその時、私の声に初めて蘭さんが反応した。

「……え？…私を……助けに来てくれたの……？」

暗闇の中、ポツリと聞こえる綺麗なソプラノの声。

———良かった。思ったよりは元気そうだ。

目隠しと拘束をされた蘭さんの様子がイマイチ掴めなかったが、声だけで判断すれば、さほどひどい扱いは受けてないらしい。何か薬品でも嗅がされて力が入らないだけだろう。怪我もほとんどないようだ。

「ある人から、貴女を助けるように依頼されたの。貴女は何も心配いらないわ。」

「もしかしてっ！もしかしてそれって新一ですかっ！？工藤新一ですかっっ！！？」

蘭さんの顔が一気に笑顔になる。

そう…。やっぱり貴女はどんな状況に置かれていても、工藤君のこ

とを信じているのね。

眩しい…。

貴女の、まっすぐで眩しすぎる笑顔は、暗闇しか知らない私には痛すぎるわ。

まるで真っ白な天使に、真っ黒な悪魔の私が焼かれていくみたい……。

「…ごめんなさい。それは教えられないの。」

「そう……ですか…。」

途端に笑顔が消えていく、蘭さんの素直な心。

ああ、そんな顔をしなくていいのに。

貴女の大切な彼は、いつだって貴女のことを見ていた。想っていた。

大切にしていた。

貴女が彼の気持ちを知らないだけで、ホントは想い合っている二人なのに、どうして私の前でそんな顔をするの？

何もかも持っている貴女が、何も持っていない私に対して、そんな素直な心を見せつけるなんて、あまりにも残酷じゃない。

「教えてやればいいじゃねーか。」

いつの間にか嫉妬に駆られていた私の耳に、ジンの声が飛び込んできた。

「本当のこと、教えてやれよ。」

ウォッカ、とジンが合図すると、ヘイ、と返事しながら蘭さんの目隠しを取っていく。
急に目隠しを取られたせいで視界が霞むのか、瞳をパチパチさせている蘭さん。
ようやく落ち着いたのか、ゆっくりとこちらに視線を向けた。

「毛利蘭。お前の言うように、この件には工藤新一が関わっている。」

蘭さんはビックリしたような表情を浮かべ、ジンと私の顔を交互に見ていた。

「そして、この女がお前達に降りかかった不幸の元凶、シェリーだ。」

「元…凶…？」

「そうだ。お前と工藤新一を引き離したのはシェリーだ。」

蘭さんの視線が私に向いているのが分かった。でも怖くて視線を合わせられない。

「…そしてシェリーは、お前達の言う、灰原哀の本当の姿だ。」

「まさか…。」

蘭さんも私も、文字通り立ちすくんでいる。
私はジンの言葉に反論する気さえ奪われていた。

「そしてもう一人、江戸川コナンは工藤新一だ。」

１１．嫉妬と正体（後書き）

何だかダラダラです。スランプです。ごめんなさい。
書きたいことがうまく書けなくて、モチベーションが下がり気味です…。
やはり文才のない私には、連載小説を執筆すること自体失敗だったかも、と気分は下降するばかりです。
何とか完結させたいけど……。

12．揺れる心

ワケが分からなかった。

私より数歩前に立っている、長い髪で長身の男の人が言い放った言葉。

――――お前と工藤新一を引き離したのはシェリーだ。

――――シェリーはお前達の言う、灰原哀の本当の姿だ。

――――江戸川コナンは工藤新一だ。

「……。」

つまり、今私と向かい合わせに立っていて、女の私でも見惚れそうなプロポーションと容姿を持った綺麗な女の人が、「シェリー」という人物で。

その「シェリー」は、「灰原哀」ちゃんで。

「灰原哀」ちゃんが、実は私と新一を引き離した人物で。

…そして、「江戸川コナン」君が「工藤新一」……。

「…っ！そんなの嘘よっ！！」

そんなことあるはずがない。
そりゃ、何度かコナン君が新一ではないかって疑ったことはあったけど、どう考えてもコナン君と哀ちゃんは小学生にしか見えなくて。コナン君と新一が、学園祭の時には同時に存在していたんだし。第一、人間の身体が縮んでしまうなんて考えられないし。
…それにそれに、哀ちゃんが不幸の元凶だなんて、絶対にあり得ないし。

「嘘かどうかは、そこのシェリーに直接聞いてみるんだな。」

長髪の男は可笑しそうに口元を歪めて、シェリーと言われる人を見つめていた。
シェリーさんはずっと俯いたままで、両手を握りしめながら何かに耐えているように見えた。

「…シェリー、さん。今その人が言ったことは全部ウソですよね？貴女は…灰原哀ちゃんじゃないよね？」

シェリーさんの肩がビクッと震えたのが分かった。でも、全く視線を合わせようとはしてくれない。

「ねえ、何か言ってよ…。」

嘘だと信じたい。
全てはこの男の戯言だと。とんだデマだと。
でも、シェリーさんの怯えるような仕草が、全てを肯定しているよ

うだった。

「貴女は、哀ちゃんなの？」

ゆっくりと、シェリーさんが私に瞳を合わせてくる。
雪のような真っ白い肌に、赤みがかった茶髪。大きなくるみ型の綺麗な瞳は、吸い込まれそうなほど深い深い翡翠の色。
身体の大きさ以外は、本当に哀ちゃんそっくりだった。

「……ジンが言った通りよ。私は灰原哀。私が作った薬を工藤君が飲まされ、その結果工藤君は幼児化し、江戸川コナンとなった。」
さっきまで怯えていた様子はどこへやら、淡々と事実を述べているその姿に、一切の感情は見えてこない。

「私が、貴女方を引き離した張本人よ。」

そこにいるのは、私が知っている灰原哀ちゃんじゃなくて、何も知らない大人の女性だった。

「どうしてっ！何で貴女が…っ！！」
「申し訳ないけれど、これ以上私から話すわけにはいかないわ。ここまで巻き込んでしまったのに随分勝手で悪いけれど、もう、私達

に関わらない方がいいわ。貴女が知る必要のない世界だもの。」
本当に勝手だ。
私達の日常を奪っておいて、巻き込んでおいて、関わるなと言ってくる。

「新一はっ！？新一が関わっているのに、じっとなんかしてられない！」
「…工藤君なら大丈夫よ。近いうちに必ず貴女の元へ返すわ。とにかく、見たこと、聞いたこと全て忘れなさい。でないと、貴女の命は保障できないわ。」
私のことはいくら恨んでくれても構わないから…と小さな声で囁く哀ちゃん…いや、シェリー。

なんで貴女がそんなに悲しそうなの？
貴女のせいでこんなことに巻き込まれたんでしょ？
辛いのは貴女なんかじゃない…っ。

「悪いが、お前の命はここでお終いだ。」

ジンと呼ばれた人が、私に向かって拳銃を向けていた。
後ろで私を拘束していた男の人も、ニヤニヤしながら拳銃を突きつけている。

「ジンッ！！やめて！！！」

シェリーが必死な形相で私と拳銃の間に入り込む。

「どけ。秘密を知ったからには、生かしてはおけんだろう。」

「蘭さんは組織のことについては何も知らないわ。殺す必要なんかないじゃない。」

「…甘いな、シェリー。俺達の顔を知られただけで十分な理由じゃねーか。」

「ジン！！」

バンッと乾いた音が響いた。

恐る恐る瞳を開けると、シェリーが右肩を真っ赤に染めて、その場に蹲っているのが見えた。

「次はないぞ、シェリー。…そこをどけ。」

…なんで？

なんで貴女が私を庇うの？

貴女はこの人達の仲間なんでしょ？

なんで貴女が傷つくのよ――――――哀ちゃんっっ！！

「相変わらず強情な奴だな。まぁいい。……ウォッカ！！」

「ヘイ。待ってやしたぜ。」

後ろの男が、嬉しそうに私に向かって引き金を引こうとしている。

ここまでなのね…と諦めかけたその時。

「待って！！」

哀ちゃん…シェリーが突然立ち上がり、ジンに向かって思い切り睨みつけていた。

「蘭さんの記憶が無くなればいいのね？」

「…そんなことが可能なのか？」

「ジンこそ忘れたわけじゃないでしょ？私は組織も認めた天才化学者よ。」

シェリーが地面に落したバッグを取り、中から何かを取り出した。

「それは？」

「私が密かに研究開発した薬よ。これを飲めば数日間の記憶が無くなるわ。下手に殺して大騒ぎにさせるより、記憶を無くさせて帰した方が、より安全だと思うけど。」

「…記憶の操作か。何故これを？」

「……ちょっと思うところがあったのよ。」

そう言うと、シェリーはゆっくり近づいてきた。右肩の血はまだ幾分流れてはいるが、そんなことは気にも留めていないようだった。

「いいわね？ジン。」

「…フン。お前の好きにするがいいさ。」

後ろから「兄貴、ホントに良いんですかい？」という声が聞こえて

きたが、それを全く無視したシェリーは、私に一粒の白い錠剤を見せた。

市販の風邪薬と、一見何も変わらない。

「…蘭さん。今回は貴女を巻き込んでしまって本当にごめんなさい。貴女に何を言われようとも、私には何も弁解することが無いわ。」

綺麗な瞳で私を見つめる視線は、どこか優しさを湛えた、私がよく知っている哀ちゃんのそれと同じだった。

「工藤君にね、貴女は絶対に無事に返すと約束してきたの。だから今だけでいい。私を信用して貰えないかしら？」

「…貴女、は…？」

「私のことなら心配いらないわ。貴女は自分のことだけ心配してればいいの。これを飲めば数日間の記憶が失われる…。人としての倫理に反するかもしれないけれど、貴女を助けるにはこれしかないわ。…大丈夫。身体そのものには何の影響もないはずよ。」

「…。」

「これを飲んで、早くお家に帰りなさい。ここは貴女の居場所じゃないわ。」

口を開けてと言われても、少し躊躇う。

確かにこれを飲まなければ殺されてしまうかもしれない。

でも、この人を置いていって本当にいいの？

「蘭さん。戻ったら博士達のことよろしくね。あの人達、無茶ばっかりするから…。」

「…哀…ちゃん…。」

「今だから言うけど、貴女、私の姉にどことなく似ていたわ。…姉

はもういないけれど、どうか貴女は生きて…。」

うっすらと涙に滲む翡翠の瞳。
私はこの人に従うしかなかった。

そして飲まされた一粒の薬。

気がついた時、そこは病院のベッドの上だった。

１２．揺れる心（後書き）

やっと蘭ちゃん発見までの話が繋がりました。
あー、疲れた…。

えっと、この前話の１１話なんですが、かなり気に入らないので書き直すかもしれないです。
内容は変わらないと思いますが…。
ただし予定は未定。やっぱり無責任でスミマセン＾＾；

13．待ち望んだ始まり

「蘭姉ちゃん。大丈夫？」
「…あ、コナン、君……。」

俺と博士は、蘭が入院している杯戸中央病院へとやって来た。
蘭は思ったより顔色も良く、怪我も無いようだった。

「随分心配したんだよ？どこか具合の悪いとこはない？」
「うん。大丈夫だよ。心配掛けてごめんね。」

来てくれてありがとうとニコニコしている蘭。
しかし、俺はその笑顔に違和感を感じた。……何だ？

「……蘭姉ちゃん、何も覚えてないんだって？」
「…うん。何か…何か重要なことがあったような気がするんだけど…。」

思い出そうとすれば頭痛がして、記憶を取り戻すのを邪魔するらしい。
今も記憶を手繰り寄せているようだが、やはり頭痛がするのか、若干顔をしかめている。

やっぱり、蘭を当てには出来ないか…。

そんなことを考えていると、ジーっと蘭の視線を感じた。

「どうしたの？」
「あ、ごめんね。よく分からないけど、コナン君のことが気になっ

て…。」
「僕のこと？」
「うん、変だよね。ごめんね。気にしないで。」
「？…うん。」
…誘拐されている間に何があったんだ？
俺のことが気になるってことは、俺自身に関することで何かあったっていうことか？
だから記憶が無いと言っても、無意識のうちに反応してるのか…？

「ねぇ、博士。哀ちゃんは一緒じゃないの？」
突然蘭が灰原の話題を振り、油断していた博士は面白いくらいに慌てふためいた。
「いやー、そのー、あ、哀君は…。」
博士はチラチラ俺の方へ視線を送り、助けを求めている。
…慌て過ぎだろ、博士。
「灰原なら、ちょっと風邪をこじらせちゃって、家で休んでるんだよ。」
ったく、ホント博士は嘘がつけねーな。でもこればっかりは怪しまれちゃダメだろーが。
「そう…なの。じゃあ仕方ないね。…哀ちゃんに会いたかったんだけど。」

「灰原に何か用事？」
「ううん。そんなんじゃないんだけど、何だか顔が見たくなっちゃってね。」
やっぱり私、何か変だよねーと苦笑する蘭。
……もしかして蘭のヤツ……。
「私は大丈夫だから、早く哀ちゃんの所に帰ってあげて。風邪なら一人ぼっちは心細いよ。」
「…うん。じゃあ、蘭姉ちゃんもゆっくり休んでね。」
「ありがとう。哀ちゃんにお大事にって言っといてね。」
また来るね、と言って病室を出た。
駐車場までのちょっとした距離を、博士と二人で歩きながら自分の考えをまとめる。
「新一？どうしたんじゃ？」
「…。」
「新一？」
「…やっぱりそうなのか……？」
いや、絶対にそうだ。
疑惑が確信に変わった。
蘭は灰原と顔を合わせたんだ。
だから蘭は灰原のことも気にしている。
蘭が言う「重要なこと」とは恐らく、俺達の正体に関してのことだろう。
どんな遣り取りがあったのかは分からないが、俺達の正体を知らさ

れた蘭が、ショックのあまり記憶を失った――――――そんなとこだろう。

「それにしてもいいのかね？色々聞きたいことがあったんじゃないのか？」

「…ああ。今の蘭には何も聞けないし、記憶が戻ったら戻ったで、かなり厄介なことになりそうだからな…。」

とにかく、次の作戦を早急に立てなければならない。
蘭が無事に返されたことを思うと、灰原もとりあえずは無事なのだろう。
しかし、のんびりしている時間はない。
灰原の身が危険だということは、何ら変わりが無いのだ。

とっておきの切り札からは、未だ連絡は――――――ない。

「とりあえず戻ろうぜ。」

博士の家へ向かう車の中で、これからしなくてはならない行動を、一つ一つ頭の中で整理していった。

「あーっ、帰って来た。コナン君！博士！」

博士の家の前には、コナンとして馴染みの3人。

「元太、光彦、歩美ちゃん…。オメーらどうしたんだ？」

「どうした、じゃねーよ。今日は午後から博士んちで遊ぶ約束だったじゃねーか。」

「もしかしてコナン君？忘れていたんですか？」

「あ、いや…、ハハ…。」

すっかり忘れてた。

そういや昨日の学校帰り、そんな話をしてたっけ。

「博士の家に来てみたら誰もいないみたいだし、コナン君ちに今から行こうって思ってたところだよ。…そういえば哀ちゃんは？」

「…灰原、風邪こじらせちゃって。わりーけど、遊ぶのは無理だな。」

「え！灰原さん、病気ですか？それじゃあお見舞いしないと。」

「あー、無理だな。相当しんどそうだし、うつるといけないからそっとしといてやってくれ。」

まさかこいつらに、灰原が居ないことを言うわけにはいかない。

来週からの学校も、風邪を理由に休みにしとけば、取り合えずは問題ないだろう。

「…そんなに悪いの？哀ちゃん。」

歩美が本当に心配そうにしている。

歩美だけじゃない。光彦も、元太も、心から灰原を心配している。

———良かったな、灰原。オメーはちゃんと必要とされてるんだ。

「…コナン君？」
歩美の瞳には涙がじわじわと滲んでいる。
そう、こいつらの為にも、絶対に灰原を連れ戻さなければならないんだ。

「……ありがとな。」
「え？」
「灰原を大事に思ってくれて、本当にありがとな。」

なぁ、灰原。
お前の帰ってくる場所は、やっぱりここしかねーよ。
みんながお前を待ってるんだ。
――――早く帰ってこい。

ギャアギャア騒ぐ探偵団の3人をどうにか宥めて、ようやく家の中へと入ることが出来た（騒がないから哀ちゃんの顔を見たい、と散々ごねていたが。てか、もう騒いでんじゃねーか）。
博士は気疲れしたのか、少し休む、と寝室へ籠ってしまった。

――――ブルルッ

誰も居ない静かなリビングで一人コーヒーを飲んでいると、マナーモードにしていた携帯のバイブレーションが鳴った。

そこには、待ち望んでいた人からの1通のメール。

「…フッ、了解。」

ピッとボタンを押してメールを閉じる。そしてすぐさまアドレス帳を呼び出した。

――――――さぁ、ここからが俺達の逆転勝利へのスタートだ――――――

「行動開始、だ。」

ずっと追い続けてきた黒の組織との直接対決の為、俺はある所へ電話を掛けた。

１４．必要なもの

『ハーイ、クールキッド！お久しぶりですね。』

電話口から聞こえるハイテンションな声の持ち主―――ジョディ先生に思わず微笑んだ。

「久しぶりだね。ジョディ先生も元気そうで良かった。」

ＦＢＩ捜査官、ジョディ・スターリング。

これまでも度々組織の奴らとの対決で、ジョディ先生と協力をしてきた。

同じＦＢＩ捜査官の赤井秀一が死んでしまってから、表面上は落ち着きを取り戻してはいたが、内面、悲しみに暮れていたことは知っていた。

『…コナン君が電話をくれたってことは、何かあったのね。』

「ジョディ先生は話が早くて助かるよ。」

さすがはジョディ先生。

全てを言わなくても、すぐに察してくれる。

でなきゃ、ＦＢＩ捜査官なんて務まらないか…なんて考えて思わず苦笑した。

『コナン君？』

苦笑した雰囲気まで伝わったのだろうか？いぶかしげなジョディ先生の声が響く。

……察しが良すぎるのも問題だな。

「あ、ごめん。何でもないよ。…実はね、協力して欲しいことがあるんだ。」

俺は、昨日、今日と立て続けに起こった出来事を全て話した。

蘭が組織に誘拐されたこと。
灰原宛てに、奴らからのメールが届いたこと。
蘭を助けるために、灰原が組織に戻ったこと。
蘭が無事に発見されたこと。
その蘭はこの数日間の記憶を無くしていて、何があったのか全く覚えていないこと。

…俺達の正体のことについては何も言わなかった。灰原のことに関してはある程度感づいてはいるだろうが、俺のことについてはどこまで知っているのか、イマイチ確信が持てなかったからだ。

『…そう、哀ちゃんが…。やっぱり私達が護衛につくべきだったわね。』
「仕方ないよ。ＦＢＩの護衛がついたら、余計に目立っちゃうからね。とにかく、早急に会えないかな？」
『ええ。早く哀ちゃんを助けてあげないとね。…ジェイムズに連絡するわ。』

ＦＢＩ長官のジェイムズ・ブラックさんに連絡が取れ次第、こちらへ連絡をくれるように頼んで電話を切った。

ふぅっと大きく息をつく。

本当は、静かに連絡待ちをしていられる程の気持ちの余裕はない。
すぐにでもここから駆け出したかった。

こうしている間にも、灰原は危険な目に遭っているのかもしれない…。

そう思うと気は焦るばかりで、じっとしていられなくなる。
しかし、作戦も何もない状態で気持ちだけで突進していったとしても、俺ばかりか灰原までも、更なる危険に晒してしまうだけだろうということは安易に想像できた。
こういう時こそ冷静にならなければならない。

幸いにも、俺には協力してくれる味方がいる。
切り札も用意できた。
それに何より、俺には「灰原を守る」という大事な約束がある。

―――『守って、くれるんでしょ？』

そうさ。俺達は運命共同体。
生きるのも一緒。死ぬのも一緒。…そう言ってたのは灰原だったな。
幼児化なんてありえねー運命を共有し、誰も俺達の間には入り込めない。
…たとえ、それが蘭であっても。

「え…？」

今、俺は何を思った？

何かとんでもないことを思わなかったか？

――――俺達の間を、たとえ蘭でも邪魔されたくない――――

「…ハハ、まさか…。」

俺はずっと蘭だけを見つめてきた。
他の女になんて興味なかったし、いつも蘭が隣にいてくれてたから、
蘭以外に目を移すことは必要なかった。
蘭は、すげー良い奴だと思う。
男女分け隔てなく優しいし、困っている人がいれば手を出さずにはいられない。
みんなの人気者で、常に周りに人が集まって来る。
そんな蘭だから惹かれた。
ずっと、俺が守ってやりたいって思ってた。

…だけど。
だけどいつの間にか、灰原のことが気になっていた。
常に冷静沈着なアイツ。
可愛くない物の言い方しか出来ないアイツ。
周囲から一歩引いて、自ら独りになろうとするアイツ。
本当はすごく優しいくせに、それを隠そうとするアイツ。

今まで俺の周りには、灰原みたいなタイプの人間はいなかった。
だからそんな灰原に対して、どう接していけば良いのか分からなかった。
でもいつの間にか、ホントにいつの間にか「素」で接している自分がいて。

蘭には見せることが無かった自分の弱さも、灰原には隠さず晒してきた。
そんな俺に灰原は「仕方ないわね」の一言で、分かりにくい優しさを与えてくれる。
そして、それに癒されている自分がいる。

「あー、そういうことか…。」

何で今まで気付かなかったんだろう。
組織の事とか、解毒剤の事とかそんなことは関係ない。
「灰原を守る」の約束に、そこには特別な理由はない。

――――江戸川コナンには灰原哀が必要――――

ただそれだけ。
ただそれだけなんだけど、一番大切な想い。

「灰原、待ってろよ。」

ならば、取り返さなければならない。
博士の為に、探偵団のみんなの為に、……そして俺の為に。

「ぜってー連れ戻す。」

明美さん。
俺が灰原を助け出すまで、アイツを見守っててくれよ。
貴女が守りたかった妹は、俺が絶対守り通すから。

明美さんには悪いけど、まだ貴女に会わせるわけにはいかないから。
灰原哀として、宮野志保として、今までたくさん苦しんだ分、これから誰よりも幸せにならなければならないから。

『頼んだわよ。小さな探偵さん。』

最後に聞いた明美さんの声。
それが再び俺の耳に届いた気がした。

１４．必要なもの（後書き）

今月中に引っ越し＋転職の為、今後の投稿が遅れる可能性があります。
投稿できる分は、近日中にやってしまおうとは考えていますが、どこまで更新できるか…（^＿^；）
あー、引っ越しめんどくさい…。

15．追い求めたもの

電気をつけても薄暗い部屋の中。
部屋には机とパソコンと薬品棚、そして簡易ベッドとソファーとテーブル。何の飾り気もない。
窓も無くて、代わりにあるのは通気口。
部屋の奥には、バス・トイレも設置されている。
なるほど。ここから一歩も出られないってわけね…。
撃たれた右肩がズキンと痛む。
弾が掠っただけだから、大した怪我ではない。
それでもある程度の治療をしなければ、とてもじゃないが、薬の研究なんて出来そうにない。

「…ほう、また身体は縮んだのか。」
ハッと振り向くと、部屋の入口にはジンが立っていた。
「……何の用？」
震えそうになる身体に叱咤して、努めて冷静に振る舞う。
私がこの部屋に連れて来られた直後、解毒剤の効果が切れた身体は、再び灰原哀の姿に戻っていた。
ちょうどその間、ジンとウォッカはここを離れていて、この部屋には誰もいなかった。
もちろん、この部屋からは自力での脱出は不可能。鍵も外側からし

か開けられないようになっている。
とにかく右肩の治療をしようと、薬品棚から消毒液とガーゼ、包帯を取り出した。
「一人じゃ、治療もできねーんじゃないかと思ってな。」
「…結構よ。これくらい自分で出来るわ。」
そう言いながら怪我をした右肩を露出し、消毒をする。
私は右利きだから、本当はやりにくくて仕方が無かったのだが、ジンなんかに手伝って貰う気はさらさらない。
消毒を終え、ガーゼをテープで固定しようとすると、その手からサッとガーゼを取られた。
「何するのよ。返して！」
「……俺がやると言ってるだろう。」
私に近づいてきたジンに思わず後ずさりしようとすると、ガシッと左肩を掴まれ身動きを封じられる。
それからジンは一言も発することも無く、実に丁寧な所作でガーゼと包帯を巻きつけた。
「……。」
驚いた。
ジンがこんなにも丁寧に治療が出来るなんて。
そもそも、ジンが他人に対して治療をしている所なんて、見たことが無い。
「…分かっているだろうが、お前は二度と、組織から抜けることは

出来ない。これまで以上に行動は制限される。この部屋から出るときは、全て監視付きだ。」
「…分かってるわ。」
「お前が下手な真似をすれば、すぐにお前に関わった奴らは皆殺しだ。」
「……。」
「お前は何も考えず、研究だけしてればいい。…俺の傍からは、二度と離さん。」
そう言い残すと、ジンは部屋から出ていってしまった。
「……ジン？」
…何だろうか。
いつもの、私が知っているジンではなかったような気がする。
どことなく、ジンの瞳に優しさが込められていたような――。
「まさかね。」
ジンに優しさなんてものがあるはずが無い。
これまで何人もの人を殺してきたくせに、その冷徹な瞳は全く色を変えない――あれはそういう男だ。
「ま、私には関係ないけど。」
ちょっと癪だが、ジンがうまく包帯を巻いてくれたおかげで、痛みが薄れたような気がする。
さあ、解毒剤の開発に取り掛からなきゃ。

パソコンを起動させて見覚えのあるファイルを開く。
…間違いない。ＡＰＴＸ４８６９のデータだ。

ずっとこれを追い求めていた。
組織にいる時は、これほど強い関心を持ってはいなかった。父から譲り受けた、唯一の形見ともいえる研究だったけれど、言ってしまえば、このＡＰＴＸ４８６９の研究のせいで、たくさんの人の運命を変えてしまったのだ。
…もちろん、その責任を父に擦り付けるつもりはないし、結局は自分自身の意志で、ここまで研究を進めてきたのだから。
だけど。
姉が殺され、本当の独りぼっちになったあの日。
私はＡＰＴＸ４８６９の研究も、シェリーとしての能力も、宮野志保としての人生も、全て自ら投げ捨てた。

――――投げ捨てたはずだったのだ。

気がつけば身体は幼児化し、組織から逃げ出していた。
灰原哀として過ごす幸せな日々。それが皮肉なことに、投げ捨てたはずのＡＰＴＸのデータが必要となったのだ。
追い求めても手に入らず、ちっとも解毒剤の研究が進まない毎日に、どこかでイライラしていた（まぁ、研究が進まなかった原因は、データだけのせいじゃないけれど）。
それだけ求めていたデータが目の前にある。

「……待ってて。工藤君。」

貴方が偽りの姿から解放されるまであと少し。
真実の姿を取り戻して、彼女の元へ帰れるまであと少し。
貴方と彼女が幸せになるまで――――あと少し。

「どうか、どうか貴方だけは幸せに……。」

いつの間にかこぼれた一粒の涙をそっと拭って、今度こそ完璧な解毒剤の開発の為、一心不乱に研究に打ち込んだ。

「…明美。お前の妹は必ず救うから。」

誰かが部屋の外からこちらを伺い、そんな風につぶやいてたことなんて、研究に必死だった私には全く届かなかった。

16．不安

嫌な夢を見た。
追いかけても追いかけても、新一が離れていってしまう夢。
新一が手の届かない、遠い所へ行ってしまう夢。

―――ねぇ新一、その先にいる女の人は誰なの―――？

「らーん、ビックリさせないでよ。心臓止まるかと思ったわよ。」

病院に運ばれた翌日。私の身体に異常が無いことが確認され、自宅に帰ることが出来た。
数日の記憶が無いことに関しては、誘拐された時に何らかの心理的ストレスがかかったせいだろう、との診断だった。記憶が戻るかは分からないとも言われた。
別にたった数日の間の事だし、記憶が戻らなくても日常生活に何ら影響はないのだが、思い出さなきゃいけないような…、でもこのまま忘れてしまっておきたいような…、そんな複雑な思いを抱えていた。

「ごめんね、園子。心配かけちゃったね。でもこの通り、大丈夫だから。」

園子は私が退院したと聞いてから、すぐに自宅へ駆け付けてくれた。目の前で心配そうな表情を浮かべる親友に、申し訳ない気持ちになる。

「ホントは病院に行きたかったんだけどさ、蘭が疲れてるんじゃないかと思って。でもホントに良かったぁ～！おばさまから居なくなったって連絡が来た時は、気が気じゃなかったわよ。」

「ホントにごめん。私にも何が起こったのかさっぱり分からなくて…。」

「…あ、覚えてないんだっけ？まぁ良いじゃない。こうして無事だったんだからさ！犯人もその内捕まるわよ。」

「……うん。」

元気のない私に園子は色々気を遣ってくれ、あれこれ楽しい話や、バーゲンの話をたくさんしてくれた。

そのおかげもあって少しは気が紛れたのだが、やっぱりどこか沈んだ気持ちはなかなか浮上しない。

「…ねぇ蘭。あんた…何かあった？」

暗い表情を隠しきれない私に、さすがに園子も気になったようだ。

「…新一が…、新一がもう…帰って来ない気がするの…。」

耐えきれなくなった私は、見た夢そのままを園子に話した。

最後に見た女の人の事を園子に話すと、わずかに驚いたような顔をしていたが、

「…フフッ、やだ蘭ったら！夢の中の出来事を真に受けてるの？」

…と、思い切り笑われた。

「考えてもみなよー、蘭。新一君にあんた以外の女が一体どこにいるわけ？」

「……そんなの分かんないよ。今だって、私の知らない所にいるんだし。」

「バカねぇ。『待っててくれ』って言われたんでしょ？それってあんたに目を向けてる証拠じゃないの。」

「そうかな…。」

「誰がどう見てもあんた達二人はお似合いの夫婦よ。気にするだけ無駄じゃない？」

「……うん。」

そうだよね。新一は『待っててくれ』『死んでも戻って来る』って言ってくれたんだもん。

私は信じて待っててていいんだよね？

そうだよね？……新一……。

それでも私の中でくすぶっていた不安な気持ちは、なかなか晴れてはくれなかった。

＊＊＊

「やぁ、コナン君。よく来たね。」

「こんにちは。ジェイムズさん。」

都内のとあるホテルの一室へ、俺はジョディ先生に連れられてやって来た。
昨日ジョディ先生と連絡を取った後、すぐにジェイムズさんに話をつけてくれたらしい。
ホテルの室内には、俺とジョディ先生、ジェイムズさん以外に、何度か顔を見たことがある数人のＦＢＩ捜査官が集まっていた。

「シェリーと呼ばれたあの女の子が組織に戻ったと聞いたが。」
「…そうなんだ。周りの人を助けるために、自分から…。」

再度、みんなに事のあらましを説明した。ある程度はジョディ先生から聞いていたのだろう。口を挟む者は誰もいなかった。

「……コナン君。聞いても良いかい？」
「…なぁに？」
「命を狙われていたはずのシェリーが、どうして今頃になって組織に連れ戻されたんだい？」

…来た。
こういう質問が来ることは初めから分かっていた。
でも俺は迷っていた。
話の流れからすると、その内俺達の正体を話さなければならなくなる。
俺はまだいい。問題は灰原だ。
アイツの意志ではないにしろ、アイツの作った薬でたくさんの命が奪われてきたのは事実だ。
…そのことを知ったら、ＦＢＩは灰原をどうするんだ？
灰原の意見も聞かずに（聞こうと思っても、聞ける状況ではないが）、俺が勝手にアイツの事を話してもいいのか？

「……コナン君？」
「…ＦＢＩは、灰原の事をどこまで掴んでいるの？」
ピンと張りつめた緊張感が俺達を包んで、少し息苦しい。
そんな中、ジョディ先生が重い口を開いた。
「…灰原哀は、組織の一員であるシェリーの仮の姿。…我々が把握していたシェリーは、２０歳前後の女性。灰原哀はどう見ても６、７歳の少女。でもこれまでの経過と、彼女の組織に関しての知識から、どうしても別人だとは思えない…。顔立ちだってそっくりだわ。」
「……。」
「よって、非常識なこととは思うけれども、灰原哀とシェリーは同一人物。…何らかの方法で身体が幼児化してしまった、と考えているわ。」
やはりバレていた。
ＦＢＩを甘く見ていた訳ではないが、こんな非常識なことが信じられているとはどうして思えなかった。
「更にもう一つ言わせてもらうならば、…コナン君、貴方も…。」
「！！」
本当に甘かった。
まさかここまでバレているとは思わなかった。
……ここまで知られているのなら、腹を括るしかない。
「まぁ、貴方の正体までは分からないけれどね。」
「…ハハッ、もういいよジョディ先生。降参だよ。」

ごめんな、灰原。
俺は全てを話すよ。…全てを話して、味方になって貰う為に。
今度こそお前を、その暗闇から解放する為に。

「俺の…俺の本当の名前は、工藤新一です。」

１６．不安（後書き）

引っ越しまでに頑張って更新しようと必死です＾＾；

１７．ＦＢＩの中で

「工藤新一って、あの高校生探偵の？」
「…はい、あの工藤新一です。」
俺はＦＢＩに全てを話した。

蘭と一緒に行った遊園地で、偶然組織の奴らの取引現場を目撃したこと。
それに気付いたジンが俺を殴りつけ、薬を飲ませたこと。
目を覚ました時には既に身体が幼児化してしまっていたこと。
奴らを追う為、探偵事務所である蘭の家に転がり込んだこと。

暫くして、灰原が転校生としてやって来たこと。
灰原は組織の化学者だったが、姉を組織に殺され、研究を中止する対抗手段を取ったこと。
灰原は独房に閉じ込められ、死ぬつもりで薬を飲んだこと。
…そして身体は幼児化し、組織から逃げ出した結果、今の養い主である阿笠博士に拾われたこと。
俺と灰原で組織を追っているうちに、数々の事件が起きたこと。

俺の口から紡ぎ出される信じられない出来事に、ＦＢＩの面々は驚いた表情のまま固まってしまっていた。

「俺と灰原が飲んだ薬はＡＰＴＸ４８６９と言われるもので、灰原が開発していた薬なんです。」

「何だって！？」
「…最初は灰原を恨みました。人を殺す毒薬を作っていた奴の気持ちなんか分かんねーって…。でも、何も分かってなかったのは俺の方なんだ。」
「どういうことだい？」
「ＡＰＴＸは別の目的があったみたいなんです。研究途上でたまたま毒薬となってしまっただけで、勝手に使っていたのはジン達組織の奴らなんです。…灰原は、勝手に人体実験として使用されるのを反対していたけど、当時はまだお姉さんが生きていて、人質に取られているようなもんだったから、強く拒否は出来なかったんです。」
そう。俺はそんなことも知らずに、あの時灰原を感情のままに強くなじった。
「結局、唯一の家族であるお姉さんは殺された。……俺の目の前で息を引き取りました。」
俺がもう少し早く気がつけば、助けられたかもしれない命。
たった一人の灰原の家族を、みすみす死なせてしまった。
…そういえば灰原の涙を見たのは、初めて出会った日のその一度きりだな…。
「…コナン君の前で？」
「十億円強奪事件って知ってますよね？」
「ええ、１年程前に起きた事件ね。秀（シュウ）の彼女が亡くなった事件……ってまさか！」
「そうです。あの事件の主犯と言われている広田雅美…本名宮野明美。赤井さんの恋人だった人です。そしてその恋人の妹が灰原なんだ。本名は宮野志保。」
「……何てことだ…。」

本当に、何という運命なんだろう。
巡り巡って出会ったその運命は、残酷で皮肉なものばっかりだ。
「俺と灰原は組織を追うのと同時に、ＡＰＴＸのデータも追っていました。俺達の身体を元に戻す解毒剤の作成には、どうしても必要なデータだったんです。試作品をいくつか灰原が作ってくれていたけど、どれもせいぜいもって２４時間くらいで、完成品には程遠かった。だから灰原が組織に戻ったのはみんなの為だけじゃなくて、解毒剤の為に……。」
「……。」

あまりにスケールが大きく、非科学的な話に、みんなが困惑しているのが見て取れる。
でもこれが現実なんだ。
今の話を信じようと信じまいと、これから灰原の救出の為には、ＦＢＩの協力は欠かせない。

「灰原は、今まで辛くて苦しい思いをしてきただろうに、そんなこと一言も話さないんです。蘭を助けに行くって言った時も、ホントは怖いくせに強がってばっかで…。アイツ、人に頼ることを知らないから、全部一人で背負いこもうとするんです。」
「コナン君…。」
「だから…だから俺は、そんな灰原を助けてやりたいんだ。守ってやりたいんだ。」
「……。」
「お願いします。灰原を助ける為に、俺に協力して下さい。」
俺は素直に頭を下げた。
これまでの工藤新一は所詮苦労知らずで、自分のやりたいようにや

ってきた。
周囲から認められ、名探偵として羨望の眼差しで見られる毎日。
こんな風に他人に頭を下げたことなんてあっただろうか？
「コナン君…いや、工藤君と呼ぶべきか。とにかく頭を上げておくれ。」
「そうよ。頭を下げる必要なんか、全くないわ。」
頭を下げる俺に、慌てたように駆け寄るジェイムズさんとジョディ先生。
あまりの慌てように、俺は姿勢を正した。
「…俺の事はコナンで構いません。今の俺は江戸川コナンですから。」
「そうか。ではコナン君、もちろん我々は君に協力するつもりだ。…いや、こちらからお願いしたいくらいだよ。」
「ありがとうございます。」
「そうよ、コナン君。これはピンチでもありチャンスでもあるわ。今度こそ奴らを叩きのめして、哀ちゃんを救い出しましょう！」
「赤井君が守りたかった人物なんだ。彼の代わりに我々が……。」
周りで傍観していた他の捜査官も、頑張ろう！今度こそ奴らを潰すぞ！との、実に頼もしい声が次々と上がってくる。赤井さんの代わりに俺達が守り通すぞ―――という声が聞こえた時点で、俺はもう一つの最大の秘密を打ち明けていないことに気がついた。
―――ヤバッ、何か言い出しづらいよなぁ…。

「いやあ、君の正体が分かってしまったら、妙に納得してしまったよ。その小学生らしからぬ頭脳は、そういうことだったんだな…。」
「あ、コナン君。そんな他人行儀な言葉で話さなくっても大丈夫だからね。じゃあ、さっそく作戦を立てましょう！」
「あ、はい……じゃなくて、あのね、ジョディ先生…。」
「ん？なあに？」
「えっと…作戦は……、もうある程度立ててあるんだ。……ある人と。」
「ある人？」

俺はこれから話す作戦について、それはそれは盛大な喜びと、そして盛大な怒りが降ってくるだろうなぁということを予想して、「この責任は、いずれあの人にとって貰おう」との思いを頭に浮かべたのだった。

１８．帰る場所（前書き）

２話同時に更新しました。
前話の「１７．ＦＢＩの中で」からどうぞ～。

１８．帰る場所

「お帰り、新一。」
「ただいま、博士。」

ＦＢＩとの作戦会議が終わり、博士の家に帰ってきた。
ジョディ先生に送って貰ったのだが、ＦＢＩが阿笠邸に出入りしている所を組織に知られてはマズイので、途中で車から降ろして貰い、そこから歩いて帰ってきた。

「とりあえず、ＦＢＩも協力してくれることになったよ。俺達の周囲の人にも、それとなく護衛についてくれるそうだし。」

阿笠博士に、ＦＢＩでの決定事項について報告する。
もちろん、この家に盗聴器等置かれてないことは調査済みだ。

「そうか。それは良かったのう。…いよいよ直接対決じゃな。」
「ああ…、そうだな。」

今頃ＦＢＩでは組織との直接対決の為、細かい調整が行われていることだろう。
実際、ＦＢＩの意気込みは凄かった。
ずっと追ってきた組織との対決ということもさることながら、俺が告げたとっておきの策には、予想通りに凄まじい反応が返ってきた。
……特にジョディ先生が。
あの後俺は随分とジョディ先生に詰め寄られ、「全部説明しなさい

！」と、それこそ生徒に叱るようにして説明を求められたものだ。
だって仕方がないじゃないか。
「敵を欺くにはまず味方から」って言うだろう？
まぁ、最後は泣いて喜んでくれたけれども…。

「そういえば新一。蘭君が家に帰ってきたそうじゃ。君にも帰って来いと連絡があったんじゃが…。」
「…そうか。ここにいた方が都合はいいけれど、そういうわけにはいかねーよな。」

組織との対決は、予定では1週間後。
それまでここに滞在するっていうのは、少々苦しいか。

「分かった。とりあえず戻るよ。博士も何かあったらすぐに連絡をしてくれ。あと、十分気をつけて。」
「ああ分かった。新一も気をつけてな。明日からの学校は、哀君は風邪ということにしておくぞ。」
「そうだな。」

自分を偽る必要のない阿笠邸に、ほんの少し名残惜しい気持ちを持ちながら、俺は毛利探偵事務所に帰って行った。

「おー、帰ったかコナン。」

「ただいま、おじさん。」
事務所の上にある自宅の方へ帰ると、リビングでおっちゃんに出迎えられた。
「悪かったな。突然博士んちに追いやってよ。」
「ううん。そんなことないよ。蘭姉ちゃんが無事で良かった。」
珍しく謝罪を口にするおっちゃん。少しバツの悪そうな顔をしている。
そりゃそうか。最初おっちゃんは、蘭の帰宅が遅いことに何の関心も示してなかったからな。
まさか、本当に誘拐されているとは思いもしなかったんだろう。
「お帰りなさい、コナン君。暫くは私もここに泊るからよろしくね。」
「英理おばさん。」
「今日は私が夕食作るから、楽しみにしててね～。」
「……ハハ、タ、タノシミダナ…。」
やっぱり帰って来るんじゃなかった！もう遅いけど…。
荷物を部屋に置いてきて、そのまま蘭の部屋に直行する。
身体はどうも無いらしいが、今日一日は安静にしておくように言われているらしい。
「蘭姉ちゃん、僕だよ。入ってもいいかな？」
軽く2回ノックすると、「どうぞ」と中から声がした。
扉を開けると、ベッドから身体を起こしたままの状態で、携帯をじ

っと見つめている蘭がいた。
…浮かない顔してるな。やっぱりどっか悪いのか？
「…コナン君、お帰り。昨日は病院に来てくれてありがとね。」
「ううん。そんなこと気にしないで。……それよりどうしたの？どっか身体の具合が悪いの？」
よく見ると、少しばかり顔色も悪いようだ。
退院するのは早かったんじゃないか？
「身体は何ともないんだよ。ただ……。」
「ただ？」
本当にどうしたんだろう。
今にも泣きそうな顔をして、一度俺に向けた視線を再び携帯に向けてしまった。
「……ねぇ、コナン君。新一は…新一は本当に帰って来るのかな？」
「…え？」
「新一が居なくなってもうすぐ1年だよね。最初の半年は時々帰ってきてくれたりしたけど、最近は電話すら掛けてきてくれないし。」
「蘭姉ちゃん…。」
「『待っててくれ』って言ってくれたから、私はそれを信じて待ってるんだけど、…新一はひょっとしてそんな約束も忘れちゃったのかな…。」
「……。」
「もう…もう新一は、帰って来ない気がするんだ。」
俺は何も答えられなかった。

確かに俺は、『待っててくれ』『死んでも戻って来る』と蘭に約束をした。
その約束はもちろん忘れてなんかいない。
蘭は「帰って来ない気がする」と言っているが、今のところ、俺は帰って来るつもりでいる。

でも最近、「帰る場所」について疑問を持つようになった。
以前はもちろん「蘭の元へ」帰るつもりでいた。
それが最近になって分からなくなってきているのだ。

――俺が蘭の元へ帰ったら、灰原はどうするんだ？
――全てを失った宮野志保は、どこに帰るんだ？

そんな考えが頭をよぎる。

それだけじゃない。
例え「帰るつもりでいる」としても、それは「絶対」ではない。「今のところ」だ。
いつの間にか「帰って来る」事に対して、その思いがあいまいになってきている自分が居る。

一体俺はどうしたんだ？
蘭が好きで好きでたまらなくて、工藤新一として絶対戻って来ると決意したあの想い。
あれはどこに行ってしまったんだ――――？

「…あ、ごめんね。変なこと言っちゃったね。気にしないでね。そんな夢を見ただけだから。」
「……蘭姉ちゃん。」
「何？」

「何があっても、僕は蘭姉ちゃんの味方だからね。」
「……ありがとう。」

じゃあ、夕飯出来たら呼びに来るね！と無理矢理明るく振る舞って、その部屋から逃げ出した。
蘭は無意識のうちに、俺（新一）の心の変化に気づいてるのかも知れない。

「俺ってサイテーだな…。」

それでも。
例え蘭が危惧するようなことが現実となってしまっても。
俺はいつまでも蘭の幼馴染だし、ずっと蘭の味方だ。
蘭を大事に想うことには何ら変わりはない。

「味方だなんて……ウソツキ。」

扉の向こうで、蘭がそう囁いていたことも知らずに。

１８．帰る場所（後書き）

グダグダコナンにイライラですね…。

１９．執着（前書き）

ある意味問題作です…。
こんな展開もありかな～と軽く流して下さい＾＾；

１９．執着

私がここに来てから3日が経った。

もっとも、寝食忘れて解毒剤の研究に没頭する私には、既に日にちの感覚というか、時間の流れというものが分からなくなっていた。そんな私に感覚をかろうじて取り戻させるのは、ご丁寧にもきちんとカレンダー機能が付いたデジタル時計だった。

窓のない地下での作業では、外の様子が分かるはずもなく、しかもこの部屋には私一人だけ。

他の研究員達は別の部屋で仕事をしているらしく、私の指示を待っているとのことだった。

彼らもＡＰＴＸ４８６９の解毒剤のデータに興味があるのだろう。

何せ「幼児化した人間を、再び元の年齢の身体に戻す」とんでもない薬なのだから。

最初、私がＡＰＴＸ自体の研究を進めないことについて、何か言われるだろうと思っていたが、意外にもその事については言及されなかった。

きっと、解毒剤の開発を先にすることは予想済みだったのだろう。

解毒剤のデータ自体、ＡＰＴＸの研究に役立つだろうから。

「解毒剤のデータが、ＡＰＴＸそのものの開発に役立つなんて、皮肉な話ね…。」

でも彼を救う為には、解毒剤を完成させるしかないのだ。

一日も早く彼を元の姿に戻して、光溢れる日常に戻って貰いたい。

———ガチャ。

セキュリティを解除し、扉を開ける音に気が付いて振り向くと、そこにはジンが立っていた。
ジンの手には、恐らく私のであろう食事を乗せたトレイ。

「あら、ジン。給仕係にでもなったの？」

たっぷり皮肉な笑顔を浮かべながら、その似合わない姿に嫌味を言ってみる。
この部屋を訪れるのは、食事を運んでくる給仕の人間と、後はジンのみ。

…何故かジンは毎日この部屋へやって来る。

「ふざけるな。お前、全然食事をしてないそうじゃないか。」

そう言いながら、バンッといささか乱暴に食事をテーブルに置く。

「…別におなかなんて空いてないもの。それに今はそれどころじゃないわ。」

確かにこの3日、ほとんど食事には手をつけていなかった。
解毒剤の開発に集中していた私には、そんな人間の基本欲求すら感

じていなかった。

「それに組織にとっても、開発は早い方がいいでしょう？」
「……良いから食べろ。お前がこれを全部食べきるまで見張ってるからな。」
「…一体何なの？私がどうなろうと貴方には関係ないでしょう？」
私を殺そうと血眼になって探していたはずのジンが、こんな事を言い出すなんて思いも寄らなかった。

――――まさか、私を心配してるの――――？

「お前に死なれたら、ＡＰＴＸの研究は進まんからな。」
「……。」

…私はバカだ。
ジンが私（というか他人全てだ）を心配なんかするはずがないじゃないか。
私がここに居るのは、全てＡＰＴＸ４８６９の開発の為。
それ以外にあるはずがない。

「……シェリー。」
「……何？」
「お前が勝手に死ぬのは許さん。…お前が死ぬ時は、俺の銃弾によって、だ。」
「……。」

「自分で死ぬのも、俺以外の奴らに殺されるのも、俺は許さん。」
「！」

……ちょっと待って。
どういう意味なの？
どうして私を見つめるその鋭い眼差しは、ほんの僅かでも優しさを湛えているの？

私を殺したかったんでしょう――――――？

「とりあえず食事しろ。これは命令だ。」
見張る、と言っていたはずのジンはその一言だけを残し、さっさと部屋から出て行ってしまった。

頭の中が混乱する。

確かにジンは、私の命を狙っていたはずだ。
杯戸シティホテルでの一件の時も、間違いなくその瞳には殺意が浮かんでいた。

「ホントに、一体何なのよ……。」

ジンが置いていった食事を見つめ、私は戸惑いを隠せなかった。

「…ジンはシェリーがお気に入りか…。」

シェリーの部屋に仕掛けた盗聴器から聞こえてくる声に耳を傾けながら、煙草の煙を吐き出した。
数年前にスパイとして組織に潜り込んだ時にも薄々感づいてはいたが、先ほどの会話からすると、ジンは相当シェリーに入れ込んでいるようだ。

シェリーを執拗に追う姿は、単に組織を裏切ったからだけではない感情が見え隠れしていた。

シェリーが抱き込んだ男。

その存在に気づいてからは、より一層シェリーに執着しているように見えた。
シェリーに向けていた殺意は、恐らく嫉妬から来るものだったのだろう。

「まずいな…。」

ジンがシェリーを、本当に愛しているのかは分からない。
ただのお気に入りの玩具みたいなものかもしれない。

「認めるわけにはいかんがな…。」

明美の事は守れなかったが、その明美が守りたかった妹は、必ず闇から救い出さねばならない。
宮野志保には、姉の代わりにその帰りを待っている仲間がたくさんいる。
闇の中でしか自分の存在価値を見出せない可哀想な志保に、光の中でも居場所があることを知って貰いたい。
志保が笑えばきっと、明美も安心して眠ることが出来るだろう。

「…決戦の日も近いな…。」

いつの間にか短くなった煙草を灰皿に押し付け、自分の仕事をするべくその場を立ち去った。

１９．執着（後書き）

まず言っておきますが、この小説はジン×シェリーではありません。
…念の為。
でもジン→シェリーってちょっと萌えｖ
私的にジンの素顔は、男前だと妄想しております。
趣味全開でスミマセン。

２０．理由（前書き）

これまで以上に、思いっきり話を捏造しています。
それでも良い方はどうぞ～。

20．理由

「随分、あの小娘に執着してるのね。」
「……何の用だ、ベルモット。」

ジンの姿を探してここにやって来たが、案の定、ジンは幼児化しているシェリーの部屋から当たり前のように出てきた。
研究員達の間の「ジンはシェリーの部屋に毎日出入りしている」という噂も、嘘ではないらしい。

「貴方が一人の女の為に、こんなに振り回されるなんて。」
「…シェリーを監視しているだけだ。」

くだらん戯言に耳を傾ける気はない――――と、私の横をすり抜けていく。
その顔は私もよく知っている、冷徹で無表情ないつもの顔。

「ジン！」
「……何だ？」
「あの子はエレーナじゃないわ。例え姿がそっくりでも、シェリーはエレーナじゃないのよ。」
「……何を言ってるのか、さっぱり分からんな。」

まっすぐに伸ばしたその背中はピクリとも動かない。
ジンは一度も私に振り向くことなく、その場を立ち去って行った。

ジンがシェリーに執着する理由。
それはジンがシェリーに対して、シェリーの母親であるエレーナの

面影を見ているからだ。
細かいことは知らないが、ジンはかつてエレーナを愛していた。
別に二人は恋人関係だったわけではない。
小さい頃から二人は知り合いだったらしいが、エレーナは自分のパートナーに宮野厚司を選んだ。
そして誕生した二つの命。
「明美」と名付けられた父親似の姉と、「志保」と名付けられた母親似の妹。
その後、その姉妹の両親はあっけなく死に、姉妹も引き離される運命にあった。
ジンが初めて幼い志保――――シェリーを見た時の表情は忘れられない。
そこには驚きと寂しさ、懐かしさ。そして「やっと帰って来た」と言わんばかりの安堵の表情……いや、歪んだ愛情だったのかもしれない。
それからジンは、事あるごとにシェリーに会いに行くようになった。シェリー自身、幼い頃はそれなりにジンに懐いていたようだった。シェリーは身体の成長と共に、両親から引き継いだ才能をいかんなく発揮させ、白衣を纏いながら大人に混ざって研究をする姿は、誰の目から見てもエレーナにそっくりだった。
ジンはいつもそんな姿のシェリーを通して、エレーナを見ていた。
「だからジンは、そんな自分から逃げ出したシェリーが許せなかっ

たのね…。」

姉を殺され、組織を裏切ったシェリー。
そのシェリーが自分ではなく、他の男――――シルバーブレットである工藤新一を頼ったことに対する嫉妬心。
きっとエレーナに続いてシェリーまでもが、他の男に捕られると思ったのだろう。

事実、明美を殺した後のジンの表情は恍惚としていた。
宮野厚司にそっくりな明美を殺したことによって、自分の恋敵に復讐出来たとでも勘違いしてしまったんだろう。

これでエレーナ――シェリー――を、自分のものにすることが出来る、と。

「…ジンも可哀想な男ね…。」

シェリーを取り戻す為に、ＦＢＩやシルバーブレットが動いているという情報は掴んでいる。
きっとこれが、組織の運命を決める決戦となるだろう。

その時ジンは、また愛しい女を失うのだろうか。
それとも、今度こそ本当に自分のものとすることが出来るのだろうか。

「私にとってはどうでもいいけれど、興味はあるわね。」

私はシルバーブレットが組織の中枢に、その名の通り「銀の弾丸」を撃ち込んでくれることを願っている。
その時、私自身はどうしているのだろうか。
ＦＢＩに捕まってしまうのか。
組織の外へ逃げられるのか。
…あるいは死んでしまうのか。

「…捕まってしまうのだけは、勘弁かしらね…。」

どちらにせよ、ＦＢＩも組織自体も、お手並み拝見といったところだろうか。

「貴女はどうするのかしらね。…シェリー。」

目の前の扉の向こうに居るであろう彼女に、答えが返ってくる筈のない質問をそっと呟いた。

「ねぇ、これ可愛くない？」
「あ、ホントだー。似合うよ、園子。」

私は学校帰りに、園子と二人でデパートへ来ていた。
最近塞ぎがちの私に気を遣ってくれたんだろう。
今度の休日にする筈だったショッピングを、ちょっと前倒ししたの

だ。
まぁ、学校帰りということもあり、今日は下見のつもりで来たんだけど…。

「園子、買いすぎじゃない？」
「エへへ。だって可愛いんだもん。」

最後に、ケーキも買いたいからデパ地下行こう！と園子に引きずられる始末。
今度の休日の買い物分のお小遣い、園子大丈夫なのかしら…と、大きなお世話ながらも気にしてしまい、一生懸命ケーキを選んでいる園子に苦笑いを零す。

そんな園子から視線を外し周りを見渡してみると、向かいのショップにはたくさんのお酒が並んでいた。

「蘭？お酒なんかに興味あったっけ？」
「ううん、別に。ただ何となく見てただけだよ。」
「そうだよねぇ。優等生の蘭がお酒に興味があるはずないわよね。」
「園子ったら。別に優等生なわけじゃ…。」

そんな事を言いながら何気なく見た視線の先には、ワインの陳列棚。
その中の１本に「ＳＨＥＲＲＹ」という文字。

―――ズキンッ！

「……っ！」

こめかみに鋭い痛みが走る。
そしてそんな痛みと共に頭に浮かんでくるのは、銀髪の男とサングラスの男。
そして色白で、どこか儚い感じの綺麗な女性。

――――あれは…、あれは誰だった……？

「…シェ、リー……？」

『この女がお前達に降りかかった不幸の元凶、シェリーだ。』
『お前と工藤新一を引き離したのはシェリーだ。』

「……あ…。」

こめかみがズキンズキンと激しく痛む。
額からは汗が滲みだし、その場に立っていられなくなった。

「ちょっと蘭！どうしたのよっ！？」

園子の声が次第に遠くなる。
目の前に広がるはずの視界も、次第に真っ暗な闇へと変わりつつある。

――ああ、私は知っている。
シェリーという人物も、その正体も。
そして新一がどうしているのかも。

――だって、だって工藤新一は……、工藤新一の正体は――……

「蘭っ！蘭っっ！！」

私を呼ぶ園子の声を最後に、一切の音と視界を遮断した。

２０．理由（後書き）

ま、まさかのジンの過去捏造話でした。
スミマセ～ン＾＾；
ジンがシェリーを追い続ける理由に、こんな過去があったら面白いなぁと以前から妄想してました。
似たような妄想をされてる方って、他にいらっしゃるんですかね？
……妄想は自由ですよね（＊＾＾）ｖ

21．心の迷い

「今のところ、頭部ＣＴにも脳波にも異常はありません。お嬢さんは少し疲れていたのかもしれませんね。取りあえずは目が覚めるまで、入院という形をとりましょう。」
「はい。…先生、ありがとうございました。」

ここは杯戸中央病院の一室。
買い物中に突然蘭が倒れたとの連絡を受け、再びこの病院へとやって来た。
個室ベッドには真っ白な顔の蘭が横たわり、その腕には１本の点滴がつながっている。

「ごめんなさい、おじさま、おばさま。私が蘭を引きずりまわしたから…っ！」

蘭と一緒に買い物をしていた園子は、涙を流しながら必死におっちゃんと英理さんに頭を下げている。

「貴女のせいじゃないわよ、園子ちゃん。先生が仰ったとおり、ちょっと疲れが出ただけよ。」
「でも、それは私が…！」
「大丈夫だ。お前は蘭を気にして買い物に連れて行ってくれたんだろう？お前の気遣いに感謝こそすれ、責めることなんざこれっぽっちもないさ。」

ありがとな、と言いながら園子の頭をポンポンと撫でるおっちゃん。
そんな二人の落ち着いた態度に、園子自身も緊張が解けたのだろう。
少しずつ冷静さを取り戻してきたようだった。

「デパ地下で買い物してる途中に、ホントに突然倒れたの。…こめかみを押さえていたから、ひどい頭痛がしてたみたい。」

…頭痛、か。

そういや蘭は、忘れてしまった数日を思い出そうとすると、頭痛がするって言ってたな。

記憶を取り戻そうとでもしていたんだろうか。

「そういえば、倒れる直前に何か呟いていたような…。」

「呟く？」

「ええ。ケーキを選んでいる途中で、蘭がお酒を眺めていたの。そんな蘭をからかったりしていたんだけど……。あ、そうだわ！あの時の蘭、ワインを見ていたかしら。」

……酒、ワイン。

まさか白ワインか？

「確か、ＳＨＥＲＲＹを見てたのよ。」

「！！」

やっぱりそうだ。

蘭は…蘭は思い出してしまったんだ。失われた数日の記憶を。

そして気付いてしまったんだ。

灰原哀の正体を。

そして江戸川コナンの正体を。

「…どうしたの？コナン君。顔色が悪いみたいだけど。」
「あ、ううん大丈夫だよ。…蘭姉ちゃんが倒れたって聞いたからビックリしただけだよ。」

どうする？
蘭が目を覚ませば、きっと全てを聞いてくるに違いない。
決戦前に蘭が記憶を取り戻したとなると、蘭自身も危険に晒されてしまうかもしれない。

これまで俺は蘭を危険に晒さない為、正体をひた隠しにしてきた。
俺にとって蘭は大事な幼馴染であるし、無条件に守る対象だった。
コナンの姿になって、そんな大事な奴に初めての嘘をついた。

それは全て、蘭を守る為。

胸が痛まなかったわけではないが、それでも蘭だけは安全な所に居て欲しかったから。傷つけたくなかったから。

「これじゃ、本末転倒だな…。」

蘭が全てを知りたいのなら、俺にはそれを拒否する権利はない。
巻き込んでしまった蘭には、全てを知る権利がある。
その結果、俺と蘭の絆は切れてしまうかもしれない。

どんな理由にせよ、蘭をずっと欺いてきたのだから。
ただ。
ただ、蘭は灰原の事をどう思うだろうか。
毒薬の開発者として、灰原を恨んでしまわないだろうか。
灰原を責めてしまわないだろうか。

灰原は、蘭に明美さんを重ねて見ていることがあるということを俺は知っている。
そんな蘭から責められたりしたら、それこそ灰原の心に深い傷を負わせてしまうだろう。

これ以上は、灰原が傷つくことは何もないんだ。
元々は、俺の傲慢さが生んだ結果なのだから。

「おじさん、僕、先に帰ってるね。」
「あ、おいっ、コナン！」
「コナン君！」

おっちゃんと英理さんの呼びとめる声が聞こえたが、そんな二人の声を無視して、俺は病室を飛び出した。

取りあえず、まずはＦＢＩに連絡か？
それとやはり決戦までは、探偵事務所を離れた方が良いかもしれない。

どうするべきか…と、グルグル悩みながら探偵事務所方向へ歩いていたが、自分でも気がつかない内にその歩みは止まっていた。

「なぁーにボケっとしてんねん！！」

突然後頭部を襲った軽い衝撃と、聞きなれた関西弁。
ビックリして振り向くと、そこにはいつ見ても健康的な褐色の肌をした男。

「よっ！久しぶりやなぁ。工藤。」
「……服部…。」

そう、そこには大阪にいるはずの服部平次が、ニコニコ顔で立っていた。

21．心の迷い（後書き）

どんどん増えて行く登場人物に、めちゃめちゃ焦りを感じている自分がいます。
登場人物はもっとシンプルにしようと思ったのに…！
話を膨らませ過ぎた自分に反省します。

22．助っ人

まだまだ明るい夕方の時刻。
目の前の男の登場は、いつもいつも突然だ。

「…なんでオメーがここにいるんだよ？服部。」

俺の睨みつける様な視線にも全く動じず、服部はその身体を屈ませた。

「いやぁ、鈴木の姉ちゃんから和葉に連絡があってな。なんや、毛利の姉ちゃんが誘拐されたっちゅう話やないか。ホンマはすぐにでも飛んで行こう思うたけどな、無事帰って来た言うし、そろそろ落ち着いたか思うて来てみたんや。」
「…てか、今日は平日だろ？」
「今週は自主休校や♪」

何の悪びれもなく、しれっと言い放つ服部に力が抜ける。
そうだ、コイツはそういう男だった。

「今週は…って、ずっとこっちにいるつもりなのか？……そういえば遠山さんは？」

思わず辺りを見回して、キョロキョロと首を動かしてしまう。
いつも服部とセットの遠山さんの姿が見えない。

「和葉のアホ、風邪ひいてもうたんや。えらい高熱出してんのに一

緒に行く言うて聞かんかったんやけど、毛利の姉ちゃんが余計心配する言うて置いてきた。どうせ布団からは動かれへんやろ。」

口調は荒いが、そこには本当に遠山さんを心配している様子が伺えた。

その様子が何だか可笑しくて、ついつい口元を緩めてしまう。

「取りあえず、俺が姉ちゃんの様子を見てくる言うて一人で来たんやけど…。」

「？けど、何だ？」

「こっちに来て正解やったみたいやな。」

そう言う服部の顔は、既に俺が何事かを抱えているのに気付いているらしく、ニヤニヤしながら俺の顔を覗き込んできた。

……そういや、コイツも探偵だったな。

「…オメーにはバレバレってわけか。」

「何があったかまでは分からへん。せやけど工藤がそんなしかめっ面しながら周りの気配にも気付かんっちゅうことは、アレしかないやろ。」

「……アレ、ね…。」

「ま、こんなとこで話すこっちゃないし、ジイさんちにでも行こか。」

さ、行くで！と服部が再び歩き始める。

その方向は先ほどまで向かっていた探偵事務所ではなく、阿笠邸の方向だ。

コイツは巻き込みたくなかったんだけどな…。

そんな俺の思いを知ってか知らずか、服部は鼻歌なんか歌いながらご機嫌な様子で歩いている。
いや、俺のそんな気持ちなどとっくにお見通しなんだろう。
これは観念するしかないか…と、心の中で苦笑した。

＊＊＊

「はっ？小っこい姉ちゃんが組織に戻ったぁ～！？」
「バッ！オメー声がデケーんだよ。」
「あ、あぁ、すまん…。」

あれからやって来た阿笠邸。博士は服部の登場に驚いていたが（当たり前だ）、快く俺達を迎え入れてくれた。

俺は服部に、この数日間に起こった出来事を事細かに全て話した。
どうせ変に隠しても、きっとコイツには見破られるに違いない。
全てを話し終えた後、服部は驚きに表情が固まっていた。どうやら服部が想像していた以上の出来事だったらしく（そりゃそーだ）、言葉がなかなか出てこないようだ。

「……つーわけだから、服部は大阪に帰れ。」

無駄だとは分かりつつも、一応服部に牽制をしておく。
組織の事は服部には全く関係ない事であって、命がけの決戦に巻き込むわけにはいかない。
下手をすれば服部だけではなく、コイツの両親や遠山さん、その周囲も危険に晒すことになるかも知れないのだ。

「…！！何言うてんねん！ここまで聞いといて今更引き下がれるかっちゅうねん！」
「服部の気持ちは嬉しいけどよ、今度の決戦は今までとは違うんだ…。死ぬ、かもしれないんだぞ？オメーがそこまでしてくれなくてもいいんだ。」

そう、これは俺達の問題。
これ以上大切な奴らを危険には晒せない。

「アホか工藤！俺はお前のライバルやないんか？お前の親友やないんか？目の前でそんな奴が苦しんでんのを見て見ぬふりしろっちゅうんかいっ！？」
「オメーが関われば、周りの人も巻き込むことになるんだぞ。」
「俺の周りはそんな柔な奴はおらん。大阪府警がついとるんや。そう簡単には手出し出来ひんやろ。…それに、組織にお前の事がバレてるっちゅう事は、俺の事もとっくに調べられとるやろ。今更やで？工藤。」

案の定、服部は俺に食いかかって来た。
…やっぱり無駄骨だったか。

「毛利の姉ちゃんも気になるけど、小っこい姉ちゃんも気がかりや。いっちょ助けてやろうやないか。」

「……分かったよ。でもＦＢＩが許可したら、の話だ。」
「まぁ、そこんとこは工藤に任せるわぁ～。」
いやぁ俺らが組めば、黒の組織だろうと何だろうと敵やないわ！はっはっは～。
そんなおめでたい事を口にしながら俺の背中をバシバシ叩く服部。
……つーか、痛え。
……コイツ、ホントに大丈夫か？？
服部にバカ正直に話をしたことに少し後悔をしながら、ジョディ先生へ連絡を取るべく電話を取った。

ジョディ先生には蘭がどうやら記憶を取り戻しているらしい事と、その蘭への護衛強化の要請、そして服部の事を話した。

『毛利さんが記憶を取り戻したとなると、かなりやっかいな事になりそうね。……まだ意識は戻ってないのね？』
「うん、たぶん目が覚めたら全て聞かれると思う。…もしかしたら、今度の決戦の事だって俺を止めようとするかもしれない。」
『…そうね、そうするでしょうね。ホントは一般人の貴方を連れていくこと自体間違ってるのでしょうけど…。』
「俺は絶対行くよ。俺だって無関係じゃないんだ。俺自身の未来は自分で掴むさ。…それに灰原ばっかりに良い格好させらんねーからさ。」
『……クールキッドを止める自信はないわ。もちろん、服部君もね。

毛利さんが目覚めたら連絡を貰えるかしら？私もフォローに回るわ。』
「うん、分かったよ。…ありがとう、ジョディ先生。」
『お礼を言うのは私達の方よ。…必ず、哀ちゃんを助け出しましょう。』

それじゃ、と言って電話を切る。
電話のやり取りを見ていた服部は、自分を認めてくれた事に大満足のようだ。

「まずは、蘭君の事じゃのう…。」

今まで黙っていた博士が、ポツリと言葉を零す。
博士自身も、この決戦前にややこしい事態を起こしたくないと思っているようだ。

「取りあえず新一と服部君は、決戦まではここに泊まりなさい。毛利家に戻るのは得策とは思えん。…ワシから連絡をしておこう。」
「…悪いな、博士。博士まで気を遣わせちゃったな。」
「何を言う。娘を助け出そうとしてくれる恩人たちに、これくらいの協力はどうってことないわい。」
「……ちゃんと蘭に話して分かって貰うからさ。蘭は何も悪くねーんだ。」
「誰も悪くなんかないんじゃよ。悪いのは組織の奴らじゃ…。今度こそ全てを終わらせて、新一も蘭君も哀君もみんなが幸せになると信じておるよ。」

……これだから俺は博士に頼っちまうんだよな。
博士とはずっと昔からの付き合いだが、年齢差なんてものを気にすることなく、年の離れた俺の最初の友達――――ってところか。

何だか泣けてきそうだな。……らしくねぇ。

「そーやそーや、工藤。阿笠のジイさんに気ィ使うことなんかあらへんやろ！」

…なぜオメーがそれを言う。……服部。
いや、博士も一緒になって頷いてるんじゃねーよ。

ま、二人なりに俺を元気づけてくれてるんだろうだから、よしとするか。

「じゃ、工藤。前祝いや！」

……やっぱりオメーに話すんじゃなかったぜ。服部…。

22．助っ人（後書き）

以前に後書きしたように、近日中に引越しをします。
引越しまでにあと1話は投稿したいと思ってますが、定かではありません。
尚引越し後、新生活に慣れるのとネット環境が整うまで、約1カ月程更新できないかと思われます。
こんな駄文を待って下さっている方がいるのかは分かりませんが……ご了承下さいね。

23．黒く渦巻くもの

私と新一は、小さい頃からずっと一緒だった。
どこかに行くのも、遊ぶのも、いたずらをするのも、全部全部一緒だった。

思い出は全て共有していた。
私は新一の知らない部分は無いと思ってるし、新一だって私の知らない部分は無いと思う。

なのに。

トロピカルランドで新一と別れてからのこの1年。新一がどこにいるのか、何をしているのか、何を考えているのか全く分からない。
全てを知っていた新一に、私の知らない思い出が積み重ねられていく。

――そんなのいやっ！
――置いてかないでっっ！！

「……ん、らん、蘭！しっかりしろ！！」
強く肩を揺さぶられてハッと目を見開く。
見開いた先には、心配顔のお父さんが私を覗き込んでいた。

「…お、とう…さん。」
「…良かった。随分魘されていたぞ。」

そう言うと、お父さんは私の顔を冷たいタオルで拭ってくれた。

「ここ…、病院……？」
「そうだ。お前、買い物途中で倒れたんだぞ？覚えてるか？」
「買い、物……。」

そうだ。
園子と買い物をしていたんだっけ。

それで途中で頭痛がして……。

「…っ！！」

――――酒、ワイン、シェリー――――

お酒の名前。
黒ずくめの男。
長い銀髪、黒いサングラス。

真っ白な肌。
翡翠の瞳。
……涙に滲んだ綺麗な瞳。

「っお父さん！コナン君は！？」

ありったけの声で叫んでいた。
目覚めたばかりの身体はとてもだるく、頭痛も少ししていたが、そんな事を言っている場合ではない。

…早く捕まえないと、新一が、新一が行ってしまう。

「…え、コナン、か？」
「そうよ！どこにいるの！？」

あまりにも必死な私の形相に、お父さんは面喰っている。
きっと新一は、あのシェリーと呼ばれた哀ちゃんを救うために、命を賭けようとしている。
あの黒ずくめの人達が何者なのかは全然分からないけど、とてつもなく危険な人達であるという事だけは分かった。

今止めなければ、新一は今度こそ帰って来ないかもしれない。
二度と手の届かない所へ行ってしまうかもしれない。

「…コナンなら、しばらく博士が預かるって連絡があったぞ。お前の体調もまだ不安定なようだからってな。そういや、大阪の探偵坊主も居るって言ってたな。」
「……え？」

何故服部君が東京に居るのだろう。
何故新一と一緒に博士の家に居るのだろう。

…もしかして。

もしかして服部君は、初めから新一の事を知っていた？

そういえばコナン君の事を「工藤」と何度か呼んでいた。「似てるからつい間違える」なんて言い訳してたけど、本当は何もかも知っていたんだ。

「なんで……。」

どうして、どうして私には何も言ってくれないの？

「……んで。」

「あ？何だって？」

私の中に、怒りやら悲しさやら悔しさやら、複雑な感情が入り混じっていた。
その感情が自分にはどうしようもなくて、誰かにぶつけたい気持ちになっていた。

初めて感じる自分の中のどす黒い何か。
それが決して綺麗なものではなく、醜いものであるということは自分でも分かっていた。

「ここに、コナン君と服部君を呼んできてっ！！」

全てを聞き出さなきゃいけない。
私にとってプラスでもマイナスでも、全てを知らなければ納得なんて出来ない。

新一が何故コナン君になったのか。
あの黒ずくめの男達は誰なのか。
何故私達に黙っていたのか。

そして哀ちゃんは一体何者なのか。

…ううん、違う。

———哀ちゃんと新一の関係は何なのか。

『死んでも戻って来るから。』

あの言葉を信じ続けた自分が、なんだかすごくバカみたいに思えた。

23．黒く渦巻くもの（後書き）

明後日引越しです。
しばらく更新はストップさせて頂きます。1か月くらいかなぁ（ー”ー）↑遠い目

なるべく早めに復帰したいと思ってますが、気長ぁ～にお待ちくださいね。

２４．追求（前書き）

更新が遅くなりまして、申し訳ありませんでした。

２４．追求

杯戸中央病院の病室の一室では、異様な空気に包まれていた。
部屋の中にいるのはベッドの上でこちらを睨みつける蘭と、緊張した顔で立っている服部、そして俺の３人だけだ。

病室にいたおっちゃんや、弁護士事務所から戻ってきた英理さんを蘭が部屋から追い出し、一気に病室の温度が下がっていった。

「……何を言われるか、分かってるわよね。…新一。」
「……蘭。」

俺を睨みつける蘭の瞳は、もはや疑ってはいなかった。
コナン＝新一と確信した蘭の表情。

もう、ごまかせない。

「私が誘拐された時に、シェリーという女性から聞かされたわ。…新一はその女性が作った薬で身体が幼児化してしまったって。」
淡々と話す蘭の顔を、俺は見つめることしか出来ない。
「幼児化してしまった新一は、江戸川コナンと名乗るようになった。そして、シェリーという人物は……灰原哀ちゃんだって、ね。」
「……。」

目の前の蘭は、そう言いながら段々と表情が険しくなっていく。
普段穏やかな蘭が、こんなに険しい顔をしているのは見たことがない。
……そんな顔をさせているのは間違いなく俺なんだけれども。
「詳しい話は知らないわ。教えてもらえなかったもの。ただ、哀ちゃんが新一と私を引き離した張本人だって言っていたわ。」
「！！」
アイツ、なんてバカな事を…。
灰原は何でも自分のせいだと思い込み過ぎなんだ。
「違うんだ、蘭。これには深い理由(わけ)が……。」
「深い理由って何？哀ちゃんが新一をそんな姿にした薬を作ったっていうのは事実でしょ？そうして貴方は私に事実を隠し、二人して私を嘲笑ってきたのね。…ううん、服部君も。」
怒りの矛先は、服部にも向けられた。
突然自分に向けられた鋭い視線に、おたおたとたじろぐ服部。
「ね、姉ちゃん、別に嘲笑っていた訳じゃ…。」
「蘭、服部は何も悪くねーんだ。とにかく話を聞いてくれないか？」
「……どうして私には何も言ってくれなかったの？私の事なんてどうでも良かったの？」
じわじわと涙に滲む蘭の瞳。
何度か見てきた蘭の涙だが、この瞬間の涙が一番痛く感じる。
「新一にとって私って何？ただの幼馴染？」

「……蘭。」
「私の気持ち、知ってるんでしょ？初めてコナン君に会った時に伝えたものね。」

『私、新一が大好き！』

あれはコナンになって、初めて蘭に会った時の出来事。
探偵事務所へ向かう途中の道のりで、俺は蘭の気持ちを初めて知ったんだ。

「……ああ、知ってるさ。」

あの頃の俺は蘭のために、元の身体に何とか戻ろうと必死だった。
黒の組織を倒そうとする気持ちももちろんあったが、今ほど強い気持ちじゃなかったかもしれない。

蘭のために。
蘭に涙を流させないように。
蘭の笑顔を守るために……。

俺の優先順位は常に蘭が一番だった。
でも、今もそうなのだろうか？
蘭が大事な存在であることには何ら変わりは無い。

ただ。
ただ、一人きりで組織に戻ってしまった灰原の事もほっとけなくて。

「…服部。ワリーけど、席を外してくんねーか？」
「……工藤？」
「もう…、もうこれ以上蘭に嘘をつく事も、自分の気持ちをごまかす事も出来ねーよ。」
服部は何かを察知したのか、わかった、と一言告げた後、病室から静かに出て行った。
「…新一？」
少し怪訝そうな表情をした蘭が、まっすぐに俺を見つめてくる。
その蘭に少し苦笑した後、俺はおもむろに切り出した。
「……俺は蘭が好きだよ。」

２４．追求（後書き）

大変お久しぶりです。
なかなか新生活が落ち着きませんで、３か月振りの投稿になってしまいました。
お待ち頂いていた（いるのか分かりませんが）皆さん、お待たせでした（＊＾＾）ｖ
これからもマイペースで更新していきますので、どうぞよろしくお願いします。

２５．失恋と告白（前書き）

更新遅くなってスミマセン。

25．失恋と告白

『……俺は蘭が好きだよ。』

目の前にいるコナン君の姿をした新一は、私から瞳を反らすことなくそう告げた。

嘘…っ。

新一が、私を好き――――――…？

「…新一っ！」

「待ってくれ、蘭。もう少し話を聞いてくれ。」

嬉しくて嬉しくて、思わず倒れた事も忘れて、ベッドから駆け出そうとしたところを新一に止められた。

何だか新一は、寂しそうな、哀しそうな表情をしている。

何となく…、何となく自分の中で、嫌な予感が駆け巡った。

「蘭は俺の中で、無条件で守らなければならない絶対的な存在なんだ。俺がコナンの姿になるまで、それは恋愛感情だと思っていた。

……いや、蘭に恋してた。俺の初恋だ。」

どこか言いづらそうに、それでも真剣な瞳を私に向けていたから、

私は声を発することが出来ない。

「蘭に『待っててくれ』って言ったあの時は、本当にオメーの所へ戻るつもりだった。あの時の気持ちは偽りじゃない…。いつもオメーの事ばかり考えていたんだ。」

その後の言葉は聞きたくなかった。
だって、私に対する気持ちは全て過去形。
知りたくなかった…真実。

それでも私には、新一の真っ直ぐな言葉から、気持ちから、逃げ出すことは出来なかった。

「…今の俺は、オメーを幼馴染として好きなんだ。」

嫌な予感は的中した。
私が新一に求めていた気持ちは、この手に掴みかけながらスルリと抜けて行った。
新一がコナン君にならなければ、こんな事にはならなかったかも知れない。
そう、新一が幼児化なんてしなければ――――――――――。

「…言っておくが、俺はこの姿になった事に、今は後悔なんかしてねーよ。」

私の心の中を読んでいたかのように、新一がポツリと呟いた。
「コナンになったばかりの時はスゲー後悔したこともあったけど、今では感謝すらしてるんだ。傲慢な新一の時には気付かなかった事が色々見えるようになったしな。」
「…命の危険に犯されても？」
「ああ。…俺は探偵なんだ。目の前の真実から、目を反らすわけにはいかねーし、な。」
そう言った新一の顔は、どこか誇らしげなものだった。

＊＊＊

いつの間にか辺りは暗い闇に覆われようとしていた。
そんな事もお構いなしに、俺も蘭も、口を開こうとはしなかった。
このまま沈黙が病室を支配しようという時に、蘭が突然言葉を発した。

「哀ちゃんが好き……なの？」
「……えっ？」

俺が灰原を好き――――――？

「新一、哀ちゃんの事になるといつも必死だった。今と違って何も

知らなかった時でさえ大切にしてるんだなって思ってた。探偵団の他の子達とはまた違って、特別に見えてた。」

私、二人のその関係がちょっぴり羨ましかったんだ――――――…。

「私と新一じゃあんなに対等になれない。いつも私が守られてばかり。…でも哀ちゃんは違ってた。」

「……蘭。」

「哀ちゃんは新一に守られてると同時に、新一の事を…ううん、新一だけじゃなくて周りのみんなの事も守っていたんだね。」

「蘭だって、俺がピンチの時はいつも助けてくれた。俺が今こうしているのは蘭のおかげだ。」

そうだ。

蘭だって俺の事を命がけで守ってくれた事もある。

決して守られてばかりのお姫様なんかじゃない。

『私は貴方が考えてるような守って下さいっていう、か弱いお嬢様じゃないけどね。』

…そういや、あいつも前にそんなこと言ってたっけな。

「…今、哀ちゃんのこと考えてたでしょ？」

「……えっ？」

「優しい表情してるよ。新一の顔。」

優しい表情？俺が？

「新一、気付いてないかもしれないけど、哀ちゃんの話をする時いつもそんな表情してる。」
「俺は別に…。」
「いいかげん認めなさいよ。頭では好きって思ってなくても、表情とか仕草とか、色んなところで表れてるんだから。好きって気持ちは頭で考えるものじゃなくて、心で感じるものでしょ？いろいろ理屈をつけたがるのは新一の悪い癖だよ。」
「……。」

俺は別に、灰原を好きだなんて思った事はなかった。
でも気が付いたらいつも灰原の事を考えてる自分がいて。
いつの間にか灰原が隣にいるのが当たり前になっていて。
あの、どこか憂いのあるあいつに笑ってほしくて。

独りぼっちのあいつを幸せにしてやりたくて――――――――――…？

「…っ！」

俺は今、何を思った……？

「やっと気付いたんだね。自分の気持ちに。」
「……。」

大切だって思っていたのは、ただの仲間意識だけじゃなかったんだ。
あいつだから、灰原だから。

「…新一の返事を聞かせて？」

蘭の顔は、何もかも分かったような表情をしていた。
今にも泣きそうなのに、本当は聞きたくないだろうに、それでも俺から視線を反らす事もなく。
ただ、ひたすら真っ直ぐに。

「…ごめん、蘭。俺は灰原が好きなんだ。」

蘭は涙を流しながら、笑顔で頷いてくれた。
散々蘭を振り回した俺が言うのは勝手すぎると十分分かってはいるが、今まで見た中で、一番綺麗な涙に見えた。

灰原、待ってろよ。
俺が必ずオメーを暗闇から引っ張り出して、明るい陽のあたる場所

に連れ戻してやる。
オメーがイヤだって言っても聞いてなんかやんねー。
ここまで俺を本気にさせたオメーが悪いんだからな。

何が何でも蘭を、探偵団のあいつらを、周りの他の人達を、……そして灰原を、守り抜いて見せる――――――。

25．失恋と告白（後書き）

何だか展開を急ぎ過ぎたような気がしますが、修正は無理でした…。
蘭ちゃん、なんてイイ子（ °∀ °）
やっぱり彼女はエンジェルなんですねぇ。

２６．再会（前書き）

大変お待たせしました。
激短ですがどうぞ。

２６．再会

手の中のそれをじっと見つめる。
赤と白のコントラスト。握りしめたら簡単に潰れてしまう小さな小さなカプセル。
見た目は一般流通している薬と何ら変わらない。

――――――薬？
いいえ、違うわね。
こんなものが薬である筈がない。

そう、これは「解毒剤」という名の毒薬。
ＡＰＴＸの毒を中和する為には、やはり「毒」を以って制するしかないのだ。

マウスの実験では１００％成功した。
どのマウスも解毒剤の毒によって苦しみ、のた打ち回りながら、それでも幼児体から成体に見事に変化を成し遂げたのだ。
だからと言ってこの結果に嬉しいわけがない。
所詮マウス実験。
人間への投与で、同じ結果が出るとは限らない。

それも壮絶な苦しみが続くと思われるオマケ付きだ。

それでも彼は飲むだろう。
本来の姿を取り戻す為に。彼女の元へと帰る為に。

「私はどうしたらいいのかしらね…。」

ゆっくりとソファーに座り込む。無意識に深い溜息を吐き出していた。

私には宮野志保に戻る理由がない。
帰る場所も、待っている人も、全てを失ってしまった。

私が灰原哀として存在している理由は、工藤新一が全てだ。

工藤君を元の姿に戻す為。
工藤君を元の世界に帰す為。

解毒剤が完成した今、生きている理由すらないのかもしれない。

『…逃げるなよ、灰原。自分の運命から逃げるんじゃねーぞ。』

ふと、彼の言葉を思い出した。
彼の言葉はいつだって私の心を掻き乱す。

「……あなたは、残酷だわ…。」

逃げる事すら許されない。
楽になってしまいたいと思うのは、そんなにいけない事なのだろうか。

「お姉ちゃん…。」

どうして死んでしまったの？
どうして私を遺して独り逝ってしまったの？

両方の瞳からポロリと涙が零れる。

…ばかね。全ては私のせいじゃない。
お姉ちゃんが死んだのも、工藤君が苦しんでいるのも…。

「――――そうやって隠れて独り泣いているところは、姉妹そろって似ているんだな。」
「…っ！」

どうして。
どうして貴方がここにいるの？

「ライ…っ！」

私の目の前には以前に忽然と姿を消したライが、哀しそうな笑みを浮かべて立っていた――――。

26．再会（後書き）

うわぁー！うわぁー！！大変お久しぶりです＼（＾ｏ＾）／
覚えておられる方はいらっしゃるのでしょうか…。私自身忘れそうでした（笑）
亀更新の小説にも関わらず、読んで下さっている方がいるという奇跡（。∀。）
密かにお気に入り数が（ちょっと）増えてる奇跡っ（。∀。）（。∀。）ありがたや～。
マイペース更新ですが、これからもどうぞよろしくお願いします。

27．ライ（前書き）

またまた短いです…。

27．ライ

「志保、紹介するわ。」

そう言って姉が連れて来た人が諸星大――――――――のちに『ライ』と呼ばれるその人だった。
最初に会った時から、この人には何かあると思っていた。
組織の人間と付き合うなんて私は反対だった。
何度も姉を説得した。

何を考えているんだ。
普通の生活を送れているお姉ちゃんなら、もっと別に良い人がいるでしょう――――――と。

でも姉は幸せそうな表情（カオ）をしていたから、本当に幸せそうだったから…。

それ以上は何も言わなかった。
姉が幸せならばそれでいいと。
私が注意深く、ライを観察していればいいこと。

――――お姉ちゃんを傷つけるような真似は絶対許さない――――

それから約1年。
少しずつライとの接触も増えていき、私自身もライの事を信用してきていた。
この人なら、本当に姉を幸せにしてくれるかもしれない。

そう思った矢先の出来事だった。

「どういうことっ！？ライが居なくなったって本当なのっ？」

どういうわけか、ライは忽然と姿を消した。
組織の上層部がライについて騒いでいたようだが、一介の研究者でしかない私の耳には真実は届かなかった。

貴方を信用し始めていたのに。
姉を幸せに出来る人だと思ってたのに。
姉の事を、本当に愛してくれていると思ってたのに…っ！

「…大君を責めないで、志保。」

泣きそうな顔をしながらも、必死に笑顔を作ろうとしている。
目の前の姉はとても小さく、儚く見えた。

「私は幸せだった。それだけで充分なの。大君が生きていてくれれば、それで…。」

それから二人で抱き合って泣いた。
姉はライの行方に心当たりがあったようだが、私からは何も追求しなかった。
ただ、姉を泣かせたライが許せなかった。

それから更に月日は流れ、姉はあっという間に殺されてしまった。
何故姉が殺されなければならなかったのか、未だに真相を知らないまま――――――…。

＊＊＊

「…何故貴方がここに居るの？――――――ライ。」

目の前の男を思い切り睨みつけた。
あの頃と違い、長かった髪をバッサリと切っている。
切れ長で鋭い目つきは変わらないが、どこか哀しみを湛えているように見える。

「ライ……か、その名前も久しぶりに聞くな。」

そう言うと懐から取り出した煙草をくわえ、火を点けた。
その仕草があの頃と変わりなくて、胸が締め付けられるような気がする。
ライはゆっくりと煙を吐き出すと、茫然と立ちすくんでいる私の方に振り返った。

「俺の本当の名は、赤井秀一だ。」
「……えっ？」

今、彼は何と言った？

「俺は、ＦＢＩの赤井秀一だ。」

27．ライ（後書き）

相変わらずの亀更新でスミマセン。
なかなか執筆意欲が湧きません。妄想は次々とあふれてくるのに…っ！
赤井秀一、カッコイイですよね！
原作でも、哀ちゃんを大事に思ってくれているシーンがあればいいなぁ。

28．独りじゃない

ＦＢＩの赤井秀一。

目の前の男は確かにそう言った。

この男が。

諸星大、コードネーム『ライ』と言われていた男が。

お姉ちゃんの恋人であった男が。

―――ＦＢＩの切れ者『赤井秀一』。

「……嘘よ…。」

半ば放心状態と化している私を横目に、この男から淡々と真実が語られていく。

ＦＢＩの赤井秀一は、スパイ活動をする為に組織に潜入した。

組織の中枢に近づくには、宮野志保―――『シェリー』に近づく事が一番の近道だった。

シェリーに近づく為に、姉の宮野明美を利用した。

狙い通りに組織の中枢に乗り込む時に、ＦＢＩのミスでその機会を逃し、ライはＦＢＩのスパイだった事がばれてしまった。

組織から抜けたのは良いが、赤井秀一を取り入った宮野明美を組織は放っておかなかった。

銀行強盗の失敗を名目に、宮野明美は殺されてしまった――――。

「じゃあ…、じゃあお姉ちゃんは…、」
「そうだ。俺のせいで明美は死んだ。殺してしまったも同然だ。」
「…っ！」

思わずカッとなって、男の身体に飛びかかる。
こんな小さな身体じゃ、思い切り殴りつけても大したダメージは与えないだろう。
それでも力一杯にひたすら殴りつけた。

「貴方のせいで…っ！お姉ちゃんを返しなさいよっ！！お姉ちゃんを返してっっ！！！」

いつの間にか引っこんでいた涙が再び流れ落ちる。
この男のせいで。
この男のせいで姉は殺されてしまったんだ。
この男のせいで私は独りぼっちになってしまったんだ。

「どうして、どうして…っ！」

いえ、違う。この人のせいじゃない。
だって私は知っていた。
この人が本当に姉を愛していた事。
姉を見る瞳が、いつも優しさと愛しさ、そして哀しみを宿していた事。
そしてそんな二人が、羨ましくて仕方がなかった事――――――。

「私の、せい、なんだ…。」

思い切り殴りつけていた両手は、いつの間にか力なくだらんとしていた。
涙は一向に止まる気配はない。

やっぱり、私は疫病神でしかないのだ。
私さえいなければ、お姉ちゃんは死ぬこともなかった。
私さえいなければ、この人もお姉ちゃんに近づく事はなかった。

そうよ、工藤君だって…。

「…工藤君は、この事を知っていたのね？」
「……。」
「工藤君は貴方を信用し、私と自分の正体を話した。」
「……志保、」
「志保だなんて呼ばないでっ！！」

もう、何が何だか分からない。
私は誰にも信用されてなんかいなかった。

目の前の男にも。
工藤君にも。

「私は宮野志保なんかじゃない。ただの小学生の灰原哀よ。宮野志保なんか知らな――――――っ！」

半狂乱になって叫ぶ私に、突然の温もりが訪れた。
抱きしめられている。
赤井秀一と名乗った男が、長身の身体を小さく折り曲げて、身体全体で私を抱きしめていた。

「…すまなかった。」

ポツリと聞こえた声は、今まで聞いた事がないくらい優しい、そして哀しい声だった。
良く見るとその広い両肩が震えている。

「お前が宮野志保だろうと灰原哀だろうと、そんなものはどっちでもいい。明美の遺言なんだ。俺はお前を必ず救う。」
「……。」

――――――ああ、この人は今もお姉ちゃんを愛しているんだ。
この人も、お姉ちゃんを失って悲しんでくれていたんだ。

さっきとは違う涙が零れてくる。
それは温かい、喜びの涙だった。

「許して欲しいとは言わん。だが、お前を守らせてほしい。…工藤新一と共に。」

ハッとして男の瞳を覗き込む。
涙でぐしゃぐしゃになった顔を、親指でそっと拭ってくれた。

「工藤新一は、お前の事が大切だそうだ。」
「……こんな、私、を？」

「もうお前は、独りなんかじゃないさ。」

独りなんかじゃない。
どれだけその言葉が欲しかったことか。

「……あ…かい、さん。」

初めて呼ぶ名前。
お姉ちゃんはもしかしたら、何もかも知っていたのかもしれない。

「…お姉ちゃんを愛してくれて、ありがとう。」

ここへ来て、初めて見せた笑顔だった。

28．独りじゃない（後書き）

このお話は短編の「懺悔」をモチーフに書きました。
良ければそちらも読んでみて下さいね。
…まぁ、個人的には短編の方がよく書けているような気がします。
うーむ（ー＿ー；）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0509h/

あなたに未来を

2010年10月20日18時39分発行